

2008
長崎県雲仙市教育委員会

雲仙市文化財調査報告書 第3集

ryuou
龍王遺跡Ⅲ

(縄文時代・古墳時代編)

-国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査-

—住居の切り合い状況—

14区SB-4、13区・14区SB-5、13区・14区SB-6の切り合い関係について第33図に示す。各住居跡の覆土は黒褐色粘質土でほぼ同様のものであり、遺構検出面での分離は難しかったが、土層断面の観察ではそれぞれの住居跡の切り合い関係がはっきりと判る。ここでは土層の詳細について詳しい説明は省くが、大まかな様子を述べる。断面図の最下層の線が住居床面想定ラインではなく、太線部分が床面と考えられるので実測図の参照の際にご注意願いたい。14区SB-4は前述したがその大部分を他の住居跡に破壊されている。土層観察では床面を張ったような状況は見られず、住居建設時に掘り込んだ最下面がそのまま床面となっている。13区・14区SB-5や13区・14区SB-6は14区SB-4に比べると倍近い土層の堆積状況が見られる。いずれの住居跡も最下層部分に、遺構掘り込み面及びその下位の土層である、明黄褐色土のブロックや細かい粒子を含む土層が厚さ10cmほど検出されており、住居床下の土層と考えられる。この土層の上面で遺物や礫の検出が多く見られることから、住居建設の際に張り床の構築を行っていることが想定される。通常床面には硬化面等が観察されるが、土質の影響かそのような痕跡は見られなかった。また、住居跡の立ち上がり部分には壁面崩壊によると考えられる三角形の堆積も見られる。その観察からは住居内に土層堆積が開始され床面上に10cmほどになった時点で壁面の崩壊が起こっている様子が伺える。

(辻田)



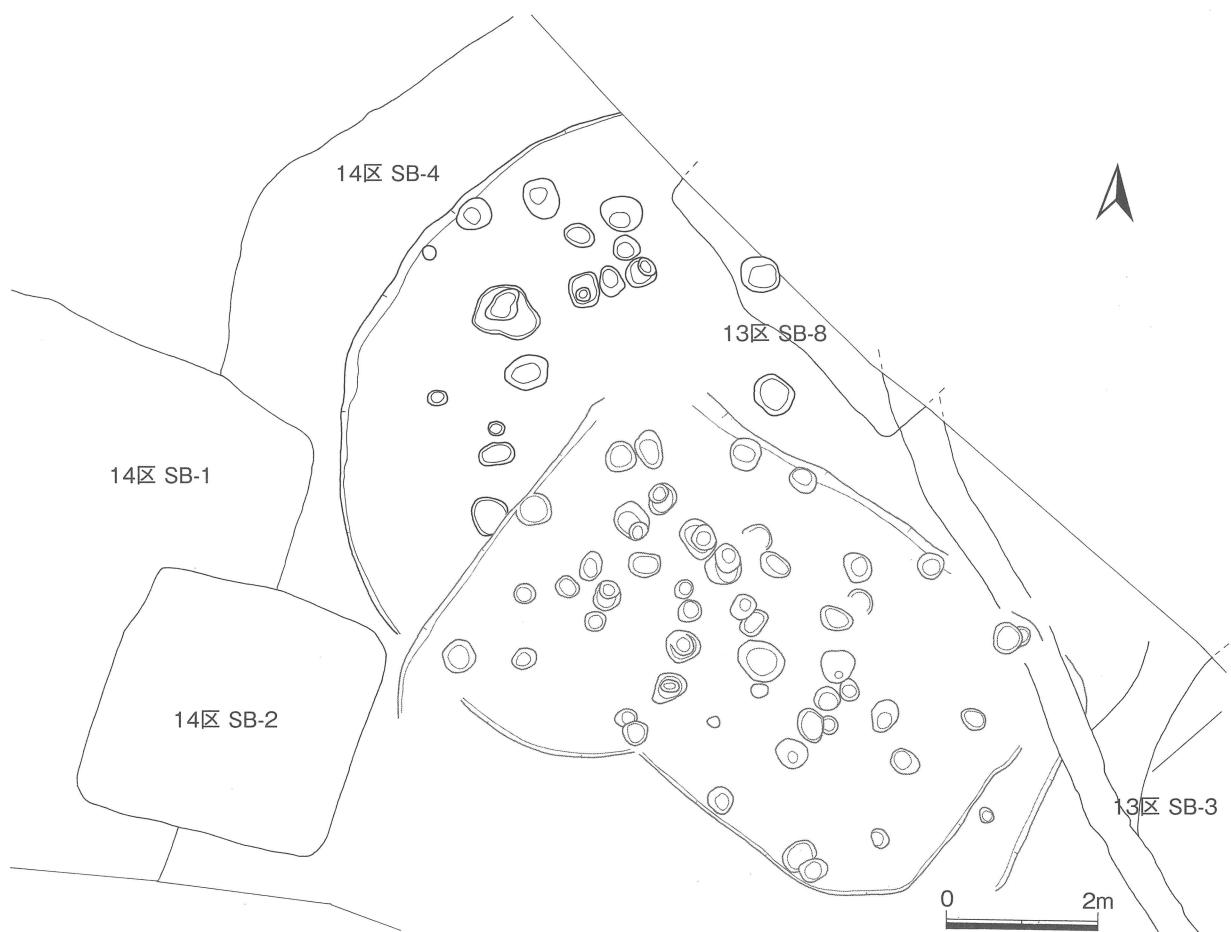
第33図 14区SB-4, 13区・14区SB-5, 13区・14区SB-6切り合い状況 (1/100)

② 13区・14区SB-5（第34図～第37図、図版4・図版10）

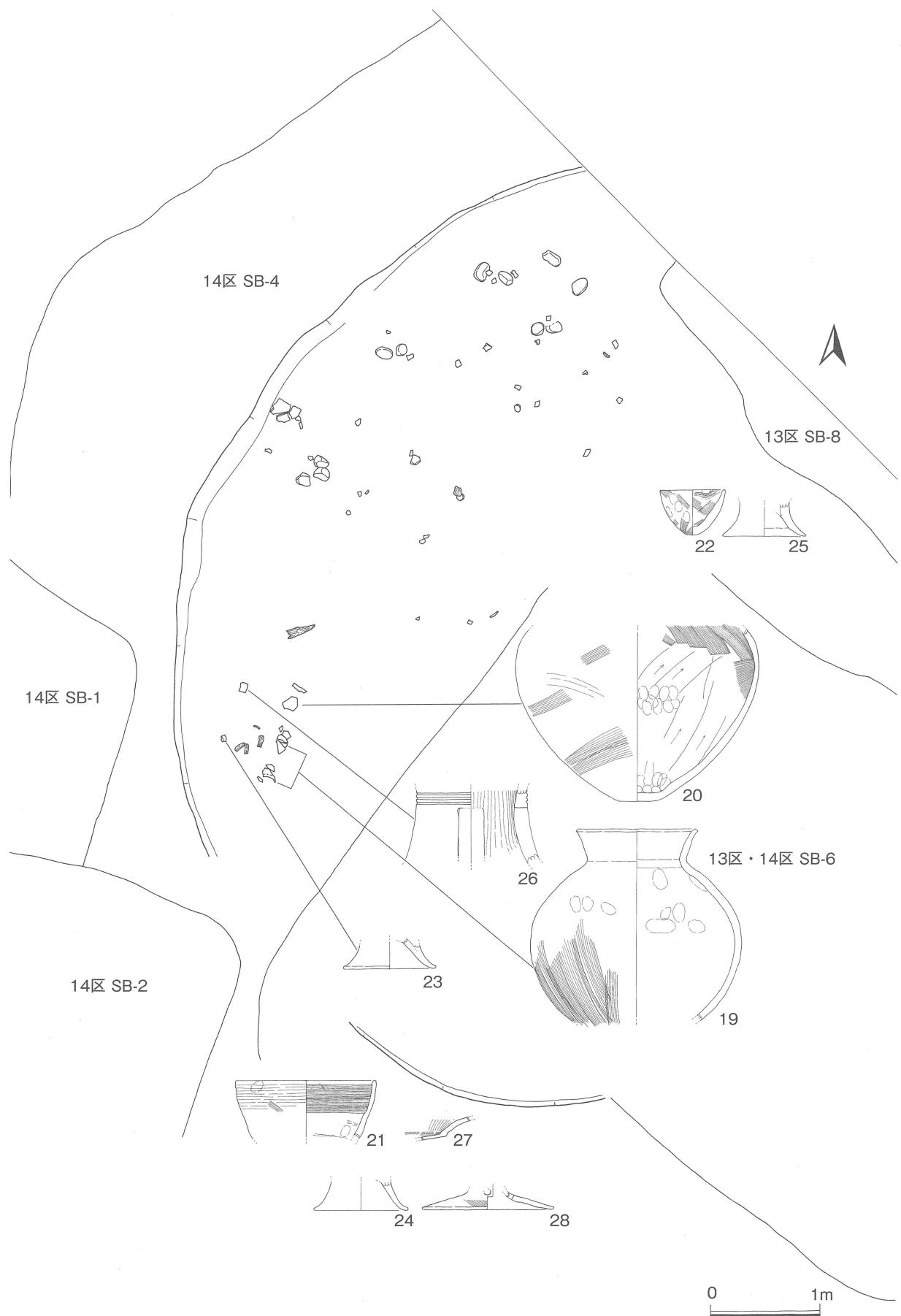
－検出状況－

前述した14区SB-4に重なるように検出されている。切り合い関係から後出する時代のものと考えられるが、出土遺物の内容からみると弥生時代終末期の住居跡と考えられ、近い時期の住居跡と考えられる。住居跡の平面形状は円形で、直径は復元径で9mほどの大きさが想定され、14区SB-4に近い大きさであろう。余談であるが、龍王遺跡の西側、倉地川を挟んだ対岸の佃遺跡では直径10m前後の住居跡や最大で径14mの円形の住居跡が検出されている。時期は弥生時代中期後半頃であり、龍王遺跡より若干古い時代である。今回の検出により、佃遺跡・龍王遺跡周辺では弥生時代中期後半～終末にかけて、同じような大型の円形住居が地点を移しながら作られていたことが想定される。住居壁面の立ち上がり部分は第33図でも示したとおり、30cmほどが確認され、まっすぐに立ち上がる。14区SB-4では見られなかった張り床の構築も確認されており、多くの遺物や礫などは床面と考えられる部分の直上で検出されている。壁周溝などの柱穴以外の住居跡内遺構は確認できなかった。住居跡内に複数のピット状遺構が見られるが、前述のとおり明確にどのピットがどの住居跡のものか特定するのは難しい。住居跡の平面形状から考えれば柱穴も円形に並ぶと考えられ、住居跡立ち上がりの平面ライン内側に平行して円形に巡るピット列を想定することは難しくない。第34図では13区・14区SB-5に重なるように検出されている、13区・14区SB-6の範囲内に検出されたピット状遺構も調子落しで図示している。どちらの住居跡の柱穴も図内に示したピット状遺構のいずれかと見て間違いないと考えられるが、特定には至っていない。

(辻田)



第34図 13区・14区SB-5検出状況 (1/100)



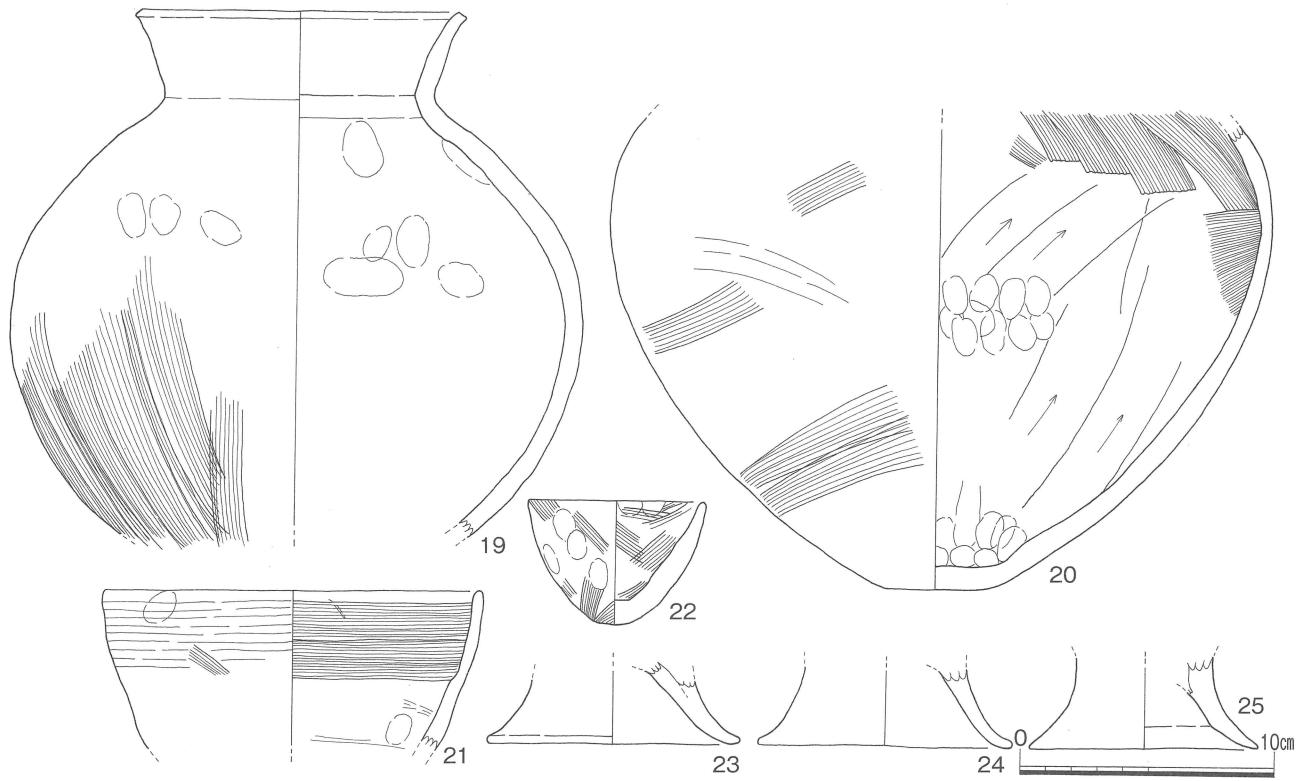
第35図 13区・14区SB-5遺物出土状況 (1/50)

一遺物出土状況一

前頁の第35図に遺物の出土状況を図示している。床面と考えられる部分の直上から土器片や礫、炭化物等が散見されるように検出される。明らかに前述の14区SB-4の検出状況とは違いがある。検出された炭化物はそれほど多いわけではなく、焼失住居とは考えにくい。また、14区SB-4に比べると破片資料が多く、遺物の量も少ない。遺物の出土状況からは、それらが住居使用時のものであると言うことを積極的に評価することは難しく、住居跡廃絶時の埋め土の中に含まれていた遺物と考えたほうがいいかも知れない。31頁第33図の断面図を見ると、住居壁面が崩壊して立ち上がり直下に土層が三角形に堆積する様子が見られるが、それは床面上に10cm程の土層が堆積した後に見られる。その堆積の中には、後述する土器片や15cm大の礫などが散在され、住居廃絶時に内部に入り込んだものと考えられる。このことからも、検出された遺物が、住居使用時のものであると言うことを積極的に評価することは難しいと考えられる。多分に前後の時期の遺物を含んでいることも考えられる。(辻田)

一出土遺物一

壺他(第36図)：19と20は壺である。19は胴部下位から口縁部にかけての資料で、約1/4程が残存している。底部は欠損しており形態は不明だが全体の形状からすると丸底か。胴部最大径は器高のほぼ中央に位置し、復元径で22.6cmを測る。球形の胴部から強く締まる頸部へ移行し、口縁部は短く、肥厚しながら口唇部で若干外反気味に立ち上がる。口唇部端は綺麗に面取りされ、断面形状が方形となり先を外方につまみ出している。胴部外面は、最大径から底部付近にかけて縦位のハケが施されており、指頭圧痕も明瞭に残る。胴部内面は、上位と頸部下に指頭圧痕が明瞭に残っており、頸部から口縁部にかけては内外面ともに丁寧な横位のナデを施している。胎土には角閃石が多く含まれており在地系か。20は底部から肩部で全体の約1/3が残存している。胴部最大径は復元径で26cmを測り、胴部上位の肩の辺りが最大径となる。器壁の厚さはほぼ均一。底部は径4cmの平底で大きく開きながら立ち上がり胴部上半部分で大きく内湾して膨らみをもつ。胴部外面は、鉄分が付着しており調整が見え



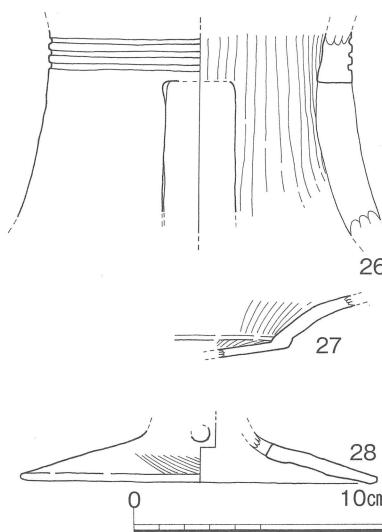
第36図 13区・14区SB-5出土土器(壺他)(1/3)

にくくなっているが、丁寧なナデと斜位のハケにより綺麗に仕上げている。胴部内面は、調整痕がよく残っており、上位は斜位のハケ、胴部最大径から底部にかけては縦位のケズリが見られ、部分的に指頭圧痕が強く残っている。**21**は浅鉢、**22**は**21**より二回りくらい小さい手捏ねの小型浅鉢である。**21**は底部が欠損しており詳細は不明だが、胴部があまり湾曲せずに底部に続くと思われる所以、若干尖り気味の丸底になるのではないだろうか。口縁部は内湾し、口唇部端で丸くおさめる。口径は復元径で14.6cmを測る。外面は、横位のナデ後に横位のハケを施している。内面は、口縁部から3.3cmの部分のみケズリの後に横位のハケを行っている。**22**は約1/2が残存していた。底部は丸底だが、全体の形状が「V」の字を呈す。口縁部は下から上に摘み上げて薄く仕上げており、手捏ね土器であることが分かる。口径は復元径で7cm、器高は4.9cmを測る。内外面ともに、不定方向へのハケと指頭圧痕が明瞭に確認できる。外面には鉄分が付着しており、調整は見えにくい。**23**～**25**は台付甕の脚台裾部である。いずれもほぼ同様の大きさで、裾部は「ハ」の字状に外反し、端部は丸くおさめ、上に跳ね上がる。**23**は外面が横位のナデ、内面は横位のケズリの後に横位のナデを施している。**24**は外面が被熱によるものか赤色化しており、器面も荒れているため調整痕が見えにくいが、全体的にナデにより仕上げられているようだ。**25**は裾部端がつまみ出されており、尖っている。外面は横位のナデ、内面は横位のケズリの後に横位のナデを施している。

器台・高坏（第37図）：**26**は透かしを施した器台の破片資料である。胴部の最も締まつたくびれ部分で復元径12cmを測る。長方形透かしの痕跡が見られ、本来は対角線上の4ヶ所にあったものと考えられ、上半部にも同様に透かしが施されていたであろう。くびれ部分には3条の篦描き直線文が施されている。上部が欠損していたため判然としないが、割れ面の観察から少なくとももう1条施文されていた痕跡が見られる。外面は、表面に鉄分が付着しており調整痕等が見えにくいが、ナデの後に縦位のミガキを行っている。内面は全体にナデ、底部側に近い部分がケズリ、上半は縦位のケズリを施している。胎土に含まれる粒子の粒は大きいものも見られるが量は少なく、また丁寧な調整により器面は滑らかである。**27**と**28**は高坏の破片資料である。**27**は有段の坏部片で、口唇部は欠損する。小破片のため口径の復元は困難であった。口縁部分は大きく外反する形状を示し、段の部分は大きく屈曲している。外面は、横位のナデの後に縦位のミガキによる暗文が見られる。内面も同様に縦位のミガキによる暗文が見られる。しかし、器面の磨耗が激しいため辛うじて施文が分かる程度である。**28**は脚裾部で、底径の復元径は14cmを測る。「ハ」の字状を呈し、裾端部は丸くおさめる。脚柱部との屈曲部に径7mmの孔が穿孔されており、本来は対角線上に4ヵ所か。外面は、ナデ後裾の部分に斜位のハケ、内面は全体に横位のナデを施している。

今回図示していないが、第36図**23**～**25**に接合するような甕の口縁部や、袋状口縁壺の口縁部等の小破片も検出されている。また、肉眼観察ではあるが、腰岳産の黒曜石剥片も多く出土しており、検出にはいたってないが、黒曜石製石器を使用していたであろう痕跡も見られる。前述した14区SB-4と比べると住居の廃絶時の状況に違いが見られ興味深い。

(小野)



第37図 13区・14区SB-5出土土器
(器台・高坏) (1/3)

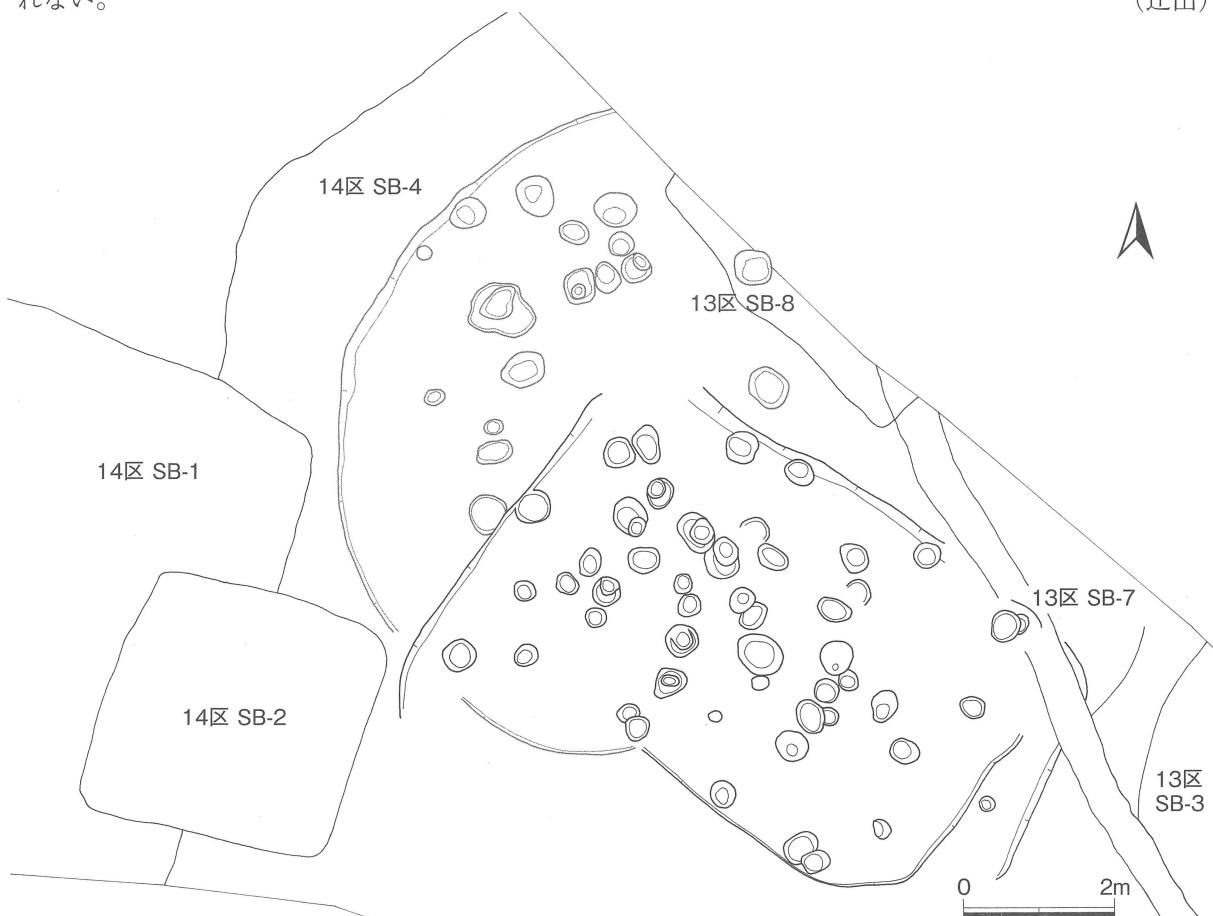
③ 13区・14区SB-6（第38図～第45図、図版4・図版10～11・図版28～29）

一検出状況

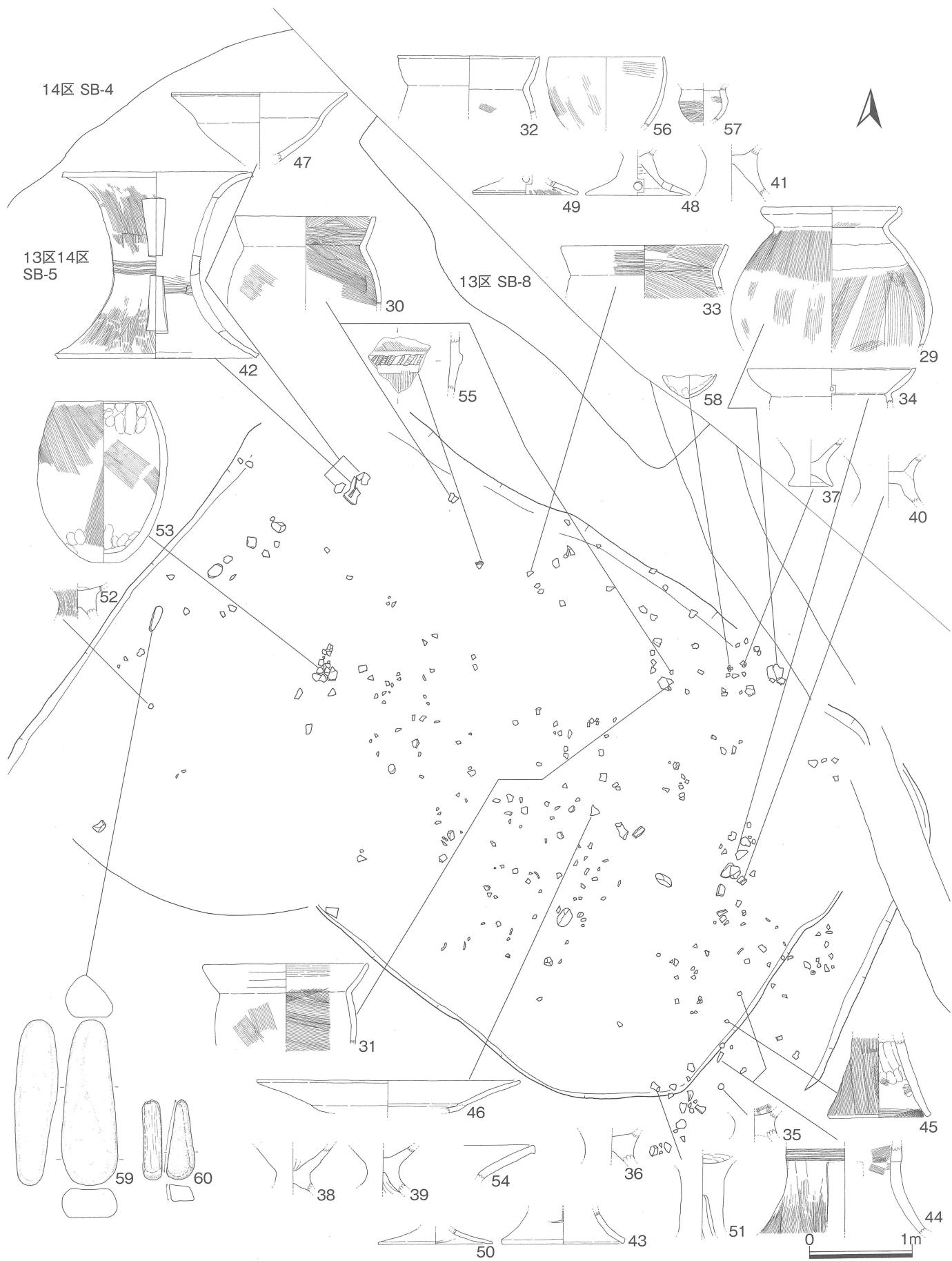
13区・14区SB-5及び13区SB-7に重なるように検出されている。切り合い関係から後出する時代のものと考えられるが、出土遺物の内容からみると弥生時代終末期の様相を示している。住居跡の南側は削平が進んでおり、立ち上がりを検出することができなかったが、平面形状はこれまでのものと大きく違い、方形あるいは長方形を示すと考えられる。大きさは、残存する部分で一辺8mを測る。第38図の平面実測図や第33図の断面図から、先行すると考えられる同じく方形あるいは長方形を呈す住居跡の痕跡が見られる。土層断面から見ても判るようにほとんどの部分は削平されてしまっており、ここで報告する土器はSB-6の後出する住居跡のものと考えて間違いないと考えられる。第38図では住居跡内のピット状遺構を多数検出しているが、前述のとおりこれまで紹介してきた先行する住居跡群の柱穴を多分に含んでいると考えられ、SB-6に対応する柱穴を特定するのは困難である。（辻田）

一遺物出土状況

次頁の第39図に遺物の出土状況を図示している。床面と考えられる部分の直上から土器片や礫、炭化物等が検出されるが、1個体に復元可能な遺物が集中して出土する部分もあれば破片資料ばかり散見される部分もあり、基本的には住居廃絶後に埋め戻す土と共に住居跡内に廃棄された遺物と考えられる。約半分が残存する器台（第41図42）や第43図53などの比較的大きな破片で検出されるものは西側に集中している。また、第45図59の石斧状の石器なども住居西側壁面近くから検出されており、住居廃絶の際住居内を清掃し、西側に不要物を集めたとも考えられる。第33図には住居の立ち上がり直下に壁面の崩壊によると考えられる三角形の土層堆積が見られ、全体を一気に埋め戻した様子は見られない。（辻田）



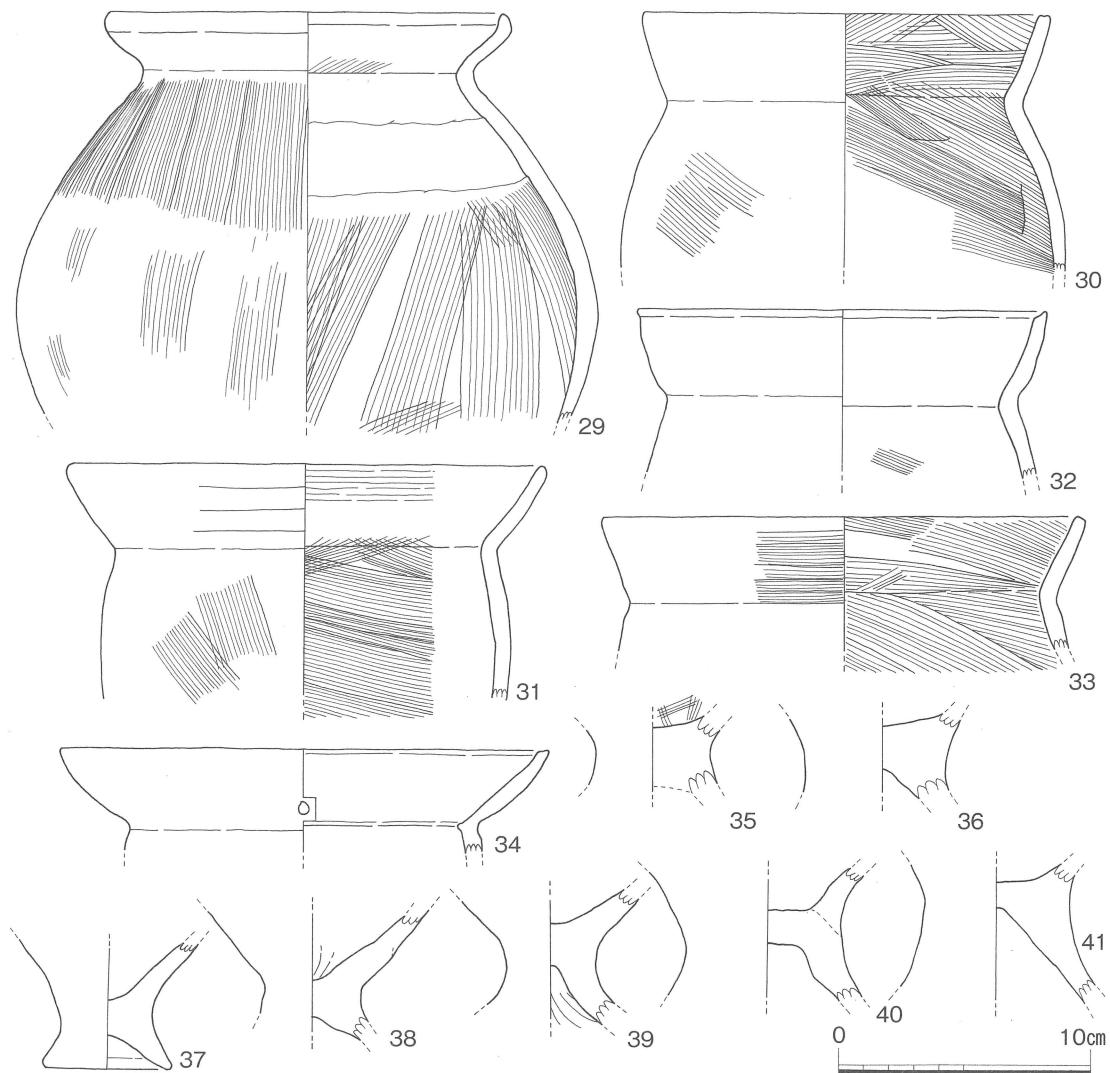
第38図 13区・14区SB-6検出状況 (1/100)



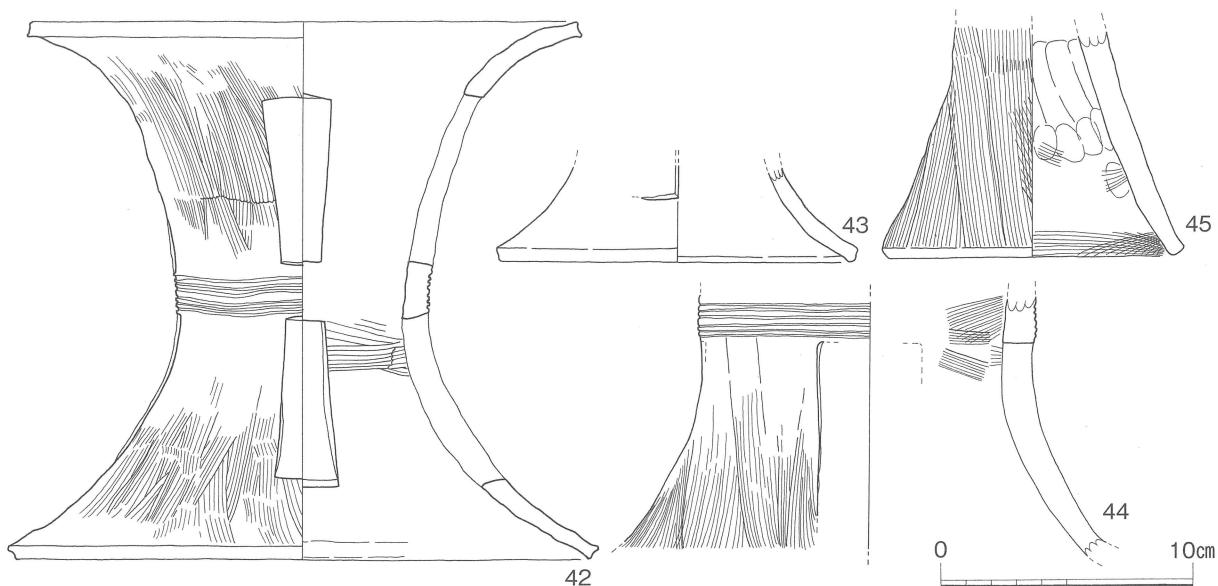
第39図 13区・14区SB-6遺物検出状況 (1/50)

一出土遺物一

甕他（第40図）：甕と台付甕を集め図示したるものである。29は甕の口縁部から胴部中位で、底部は欠損しており不明。胴部最大径は胴部中位に位置する。頸部は締まりが甘い。「く」の字に続く口縁部は短く、口唇部で直立気味に内湾する。口縁部は内・外面ともに横位のナデ。胴部外面は、頸部から下が縦位のハケ、胴部中位は縦位のハケの後にナデ消しを行っている。頸部から肩部内面は2段階にわたってケズリを行い、その後ナデを施している。その下に縦位のハケが見られる。30～33は台付甕で、口縁部から胴部中位までの破片資料である。いずれも底部は欠損しており不明。胴部は細身で、頸部の締まりが甘く、ほぼ同様の形態と大きさである。30は頸部の締まりが甘く、口縁部は若干内湾しており、口唇部端は平たく中央に一条のくぼみがある。30のみ残存している胴部最大径が口径より大きくなる。外面は鉄分が付着しており見えにくくなっているが、口縁部から頸部は横位のハケとナデ、胴部は斜位のハケを施している。内面は口縁部分が不定方向のハケ、胴部は斜位のハケである。31は他の3つに比べると口縁部が外側に開いており、端部を丸く仕上げている。口縁部外面は横位のナデ後にやや強めの横位ハケ、頸部から下は斜位のハケ後横位のナデである。口縁部内面が横位のハケ後にケズリ、頸部から下はハケである。32は口縁部が内湾しており、口唇部は内側に斜めに下がっている。内・外面ともに横位のハケ後に横位のナデで、外面は若干磨いている。33は口縁部がほぼ直立しており、端部は断面方形で外側に斜めに下がっている。外面は横位のハケ、口縁部内面は不定方向へのハケ、頸部から下は斜位のハケを施している。34は小型丸底甕の頸部から口縁部である。体部



第40図 13区・14区SB-6出土土器（甕）(1/3)

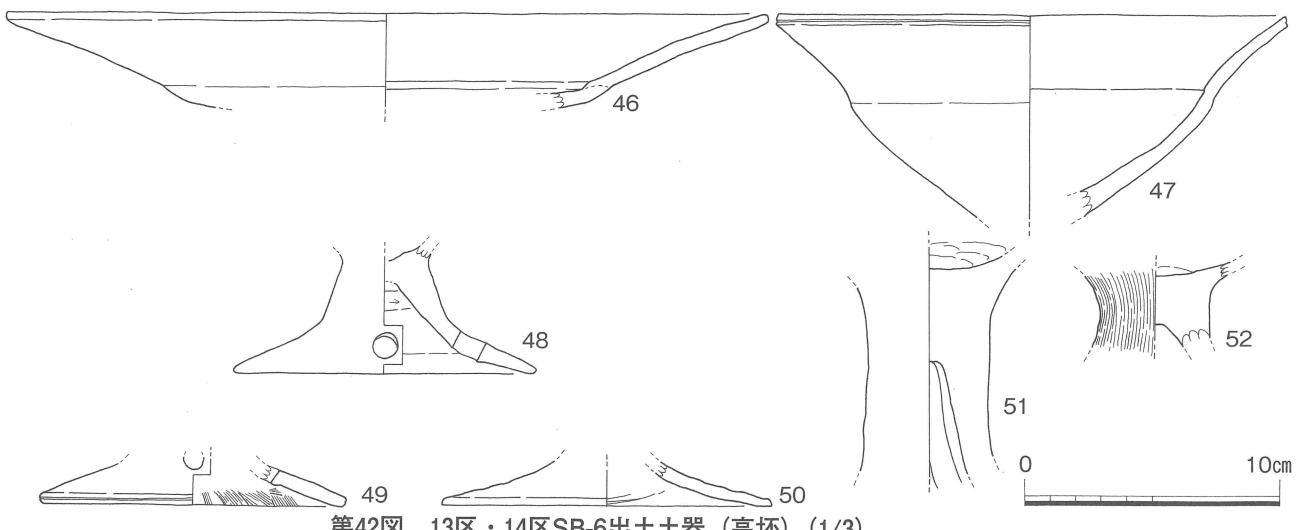


第41図 13区・14区SB-6出土土器（器台）(1/3)

は欠損しており不明だが、おそらく浅鉢の様な半球形の胴部が付くだろう。頸部は締まりがよく、内面に器壁をつまみ入れている。口縁部は丸みを帯び、中央が肥厚しながら内湾して大きく外側に開いている。口唇部端は断面方形で、中央に一条の沈線がある。口縁部には丸い透かし孔が穿孔されている。外面は器面が剥落しており、細かい調整は見えにくくなっているが、横位のナデを施している。内面は横位のハケで、上から若干ミガキを施している。35～41は台付甕の脚台部の破片資料である。37以外はいずれも裾部端は欠損している。35は外面が横位のナデ、甕底部内面は縦位のナデ、脚台部内面はケズリ後にナデを施している。36は内・外面ともに横位のナデを施している。37は小さめの脚台部片で、内・外面ともに横位のナデである。38も同じく小さめの脚台部片で、甕底部外面には指頭圧痕・ナデ、脚台部が横位のナデ、甕底部内面はケズリ後にナデ、脚台部がナデを施している。39は外面が横位のナデ、甕底部内面は縦位のナデ、脚台部内面はケズリ後にナデ。40は外面が横位のナデ、甕底部内面はケズリ後ナデ、脚台部内面は横位のナデを施している。41は外面が横位のナデ、甕底部内面がナデ、脚台部内面が縦位のケズリ後ナデを施す。

器台（第41図）：42は残存率が約50%と非常に状態が良好な器台で、形態が受け部から台裾部まで観察できる。復元受部径は22.4cm、復元裾部径は23.2cm、器高は21.2cmを測る。四方にバチ状の透かしが上下8ヶ所入ると推定。口縁端部、筒部文様等より弥生時代後期終末と考えられる。外面は受部端部が横位のナデ、その下が縦位・斜位のハケ、筒部にはナデ調整の後に6条の箇描直線文が施文され、裾部は縦位・斜位のハケ、裾部端部は縦位・斜位のハケ後粗い横位のナデを施している。内面は受部がナデ、筒部が横位・斜位のハケ後ナデ、裾部が斜位のナデ、裾部端部が横位のナデである。裾部と受け部の調整が若干違うことから、上下を意識した調整を施している可能性がある。43は長方形の透かしが入っている。外面は横位のナデ、内面は横位のハケ後横位のナデを施している。44は外面には長方形の透かしが4ヶ所あり、筒部には6条の箇描直線文が施されている。その下は縦位のハケ後ナデ消し、裾部には縦位のハケを施す。内面はケズリを行った後に横位のナデ、横位のハケを施している。42の器台とよく類似しており大きさは若干違うが、44の器台も弥生時代後期終末のものであることが考えられる。45は円筒形器台。脚台部分のみが接合で復元でき、残存状況が非常に良好であった。器壁は厚く頑丈である。裾部も頸部も綺麗な円形を呈す。裾端部は断面方形で、接地面は内側端部のみである。外面は全体的に縦位のハケ、内面は上方がケズリ、中央には指頭圧痕、下方はハケ後に横位のナデを施している。同国見町内の十園遺跡（竹中2005）でも一回り大きい円筒形器台が出土している。

高坏（第42図）：46・47は屈曲部に段が付くタイプの坏部である。46は浅い身の坏である。口縁部は外反し長く伸び、大きく外側に開き、口径は30cm。口縁端部は丸くおさめている。外面は横位のナデ、内面は口縁部が横位のナデ、坏部下半が縦位のナデを施している。47は深い身で、口縁部は坏部下半より短く、外反して外側に開く。端部は斜めに外側に切れており、沈線が一条巡っている。坏部下半は内・外面ともに横位のナデを施している。48～50はほぼ同様の形状・大きさを成しており、台裾部が「ハ」の字状に広がる脚台部である。48は唯一、脚柱部と坏部底面が残存している。復元台裾部径は12cm。裾端部は若干尖り気味に丸くおさめている。脚柱部は太く短く、円錐形である。外面は横位のナデ、坏部内面には赤色顔料が残っており、脚柱部内面はケズリ、脚裾部内面は横位のナデを施している。径1cmの丸い透かしが4つ穿孔されている。49は台裾部のみの小さい破片で、復元台裾部径は

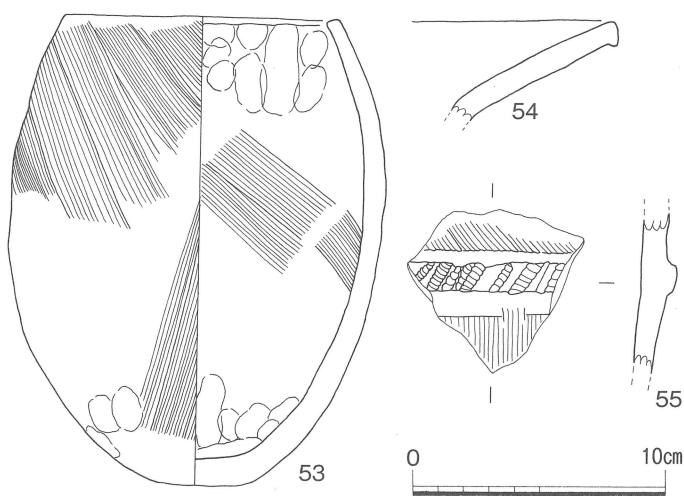


第42図 13区・14区SB-6出土土器（高坏）(1/3)

12cmである。裾端部には1条の沈線が巡っている。外面は横位のナデ、脚裾部内面が斜位のハケを施している。48と同じく丸い径8mmの透かしが穿孔されている。50も台裾部のみで、復元台裾部径は13cmである。内・外面ともに横位のナデを施している。51・52はどちらも坏部下半の底面が残っており、この2つは深めの坏部が付くと考えられる脚柱部片である。51の外面は上から下に縦位のケズリを行った後に横位のナデ、坏部内面がケズリの後にナデ、脚柱部内面も同じく上から下に縦位のケズリである。52の外面は縦位のハケの後に上から縦位のナデを施している。坏底面部分の内面がケズリの後にナデ、脚柱部内面はケズリである。47・51・52は坏部が深めで、脚柱部も太くて長く頑丈である。また、口縁部は長めで適度に開く。これらは古い形式の高坏で、弥生時代後期初頭。46・48・49・50は

坏部が浅く、口縁部も大きく外側に開いており、脚柱部は太いが短く、円錐形を呈し、台裾部も大きく開いている。これらは新しい形式の高杯で、弥生時代終末のものと考えられる。

甕（第43図）：53は接合によって完形にまで復元できた甕である。口縁部から底部まで残っており、非常に良好な資料である。甕全体が内湾し、ラグビー・ボールの様な形状である。底部は平底。胴部最大径は15cmで胴部中位より若干下に位置する。口唇部端は断面方形で内側に下がっている。底部外面には指頭



第43図 13区・14区SB-6出土土器（甕）(1/3)

圧痕が明瞭に残り、胴部上位から口縁部は縦位のハケを施した後に横位のナデ、部分的にナデ消しを行っている。底部内面はケズリと指頭圧痕が明瞭に残っており、口縁部付近は指頭圧痕とナデが多く、口縁部を作る際に下から上に摘みあげた痕跡と考えられる。54は径が30cm以上あると考えられる広口壺の口縁部か、器台の口縁部、もしくは台裾部の破片と考えられる。口縁部は外反しており、端部は断面方形である。胎土はあまり精製されておらず、含まれる粒子が大量である。外面は、横位のナデ、内面は、横位のナデの後にハケである。55も破片資料であり甕の胴部と考えられる。外面には幅広の「コ」の字状突帯文が貼り付けられており、突帯の上下は貼り付ける際に行つたであろう横位のナデである。突帯より上は斜位のハケ、下は縦位のハケが施されている。内面は縦位のハケを施している。

鉢（第44図）：56は浅鉢の口縁部から胴部下位である。底部は欠損しており判然としないが、おそらく丸底であろう。口縁部はやや内湾しており、胴部は丸みを帯びている。外面は口縁部が横位のハケの後に横位のナデ、その下が縦位のハケの後にナデである。内面は横位のハケの後横位のナデを施している。57はミニチュアの台付き甕の頸部から胴部下位である。口縁部と底部は残っていないがどちらも短いものが付くと考えられる。頸部はあまり締まっておらず、胴部は丸みを帯びている。外面は頸部から胴部中位までが横位のナデ、胴部中位から下位が横位のナデの後に横位のハケである。内面はケズリの後横位のナデで整えている。58は器高2.8cm、口縁部径6.2cmを測るミニチュアの浅鉢である。底部は尖底で「V」の字型になっている。口縁部は水平に出来ておらず上に摘み上げているため、手捏ねであることが分かる。外面は、横位のナデの後に指頭圧痕、内面は底部から口縁部に向って縦位のナデを施している。

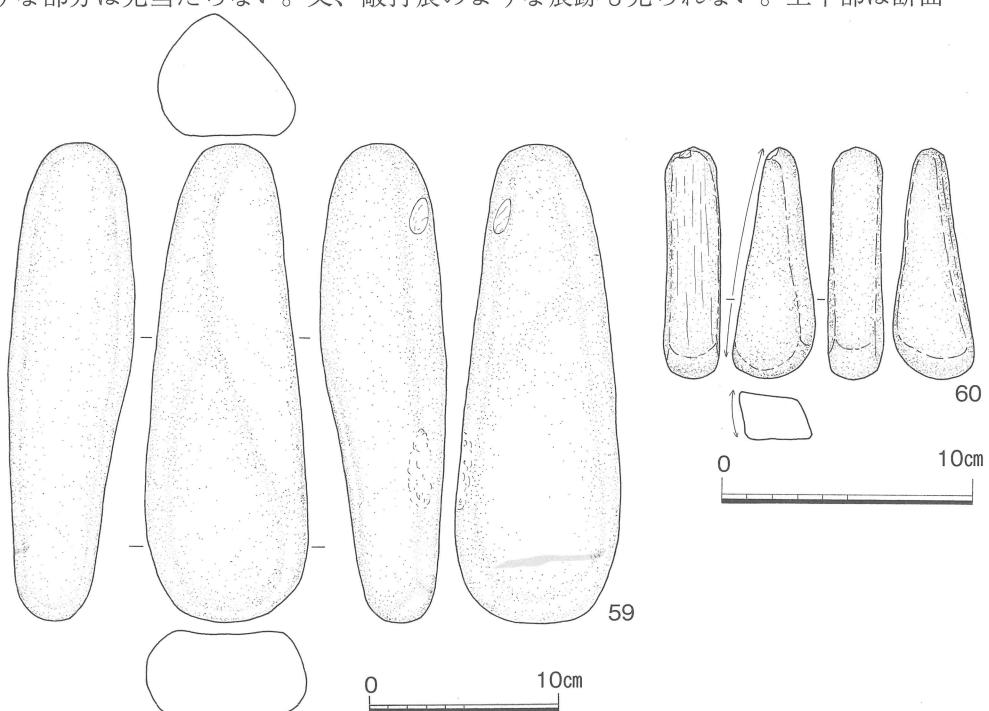
（小野）

石器（第45図）：59は長さ25.2cm、重さ2.02kgの石斧状石器である。全体に丸みを帯びており、綺麗に整形されている。正面形状は下ぶくれ状であるが、側面観は逆に下幅が細くなる。しかしながら、刃部と考えられるような部分は見当たらない。又、敲打痕のような痕跡も見られない。上半部は断面

が、いびつな三角形状であるが、下半部は、正面裏面が平に整えられている。裏面下部に鉄サビ状の付着物が見られる。

60は長さ9.1cm、重さ89.0gの砥石である。砂岩製の砥石である。左縁側が主に使用されているが他の面も綺麗に整えられている。小型の携帯用であろうか？

（辻田）



第45図 13区・14区SB-6出土石器（斧状石器・砥石）(1/4・1/3)

④ 13区SB-7（第46図～第48図、図版4・図版12）

一検出状況一

13区・14区SB-6及び13区SB-8に切られるような形で検出されている。調査区域外に大きく広がっていることが予想されるが、検出部分が少なく全体の様相はつかめない。平面形状などからは円形の比較的大きな住居跡が想定されるため、13区・14区SB-5に近い時期のものと考えられる。出土物の内容からもそのことは推測でき、弥生時代終末期の様相を示している。立ち上がりもごくわずかしか検出することができておらず、大部分が後世の住居の掘削及び削平で失われてしまっている。住居跡に伴う柱穴は多分に第38図に示した13区・14区SB-6の実測図内に見えるピット状遺構に含まれていると考えられるが、特定はできない。検出当初は13区・14区SB-5の住居東側の立ち上がり部分とも考えたが、平面形状の円周の傾きが合わず別の住居跡と考えられる。

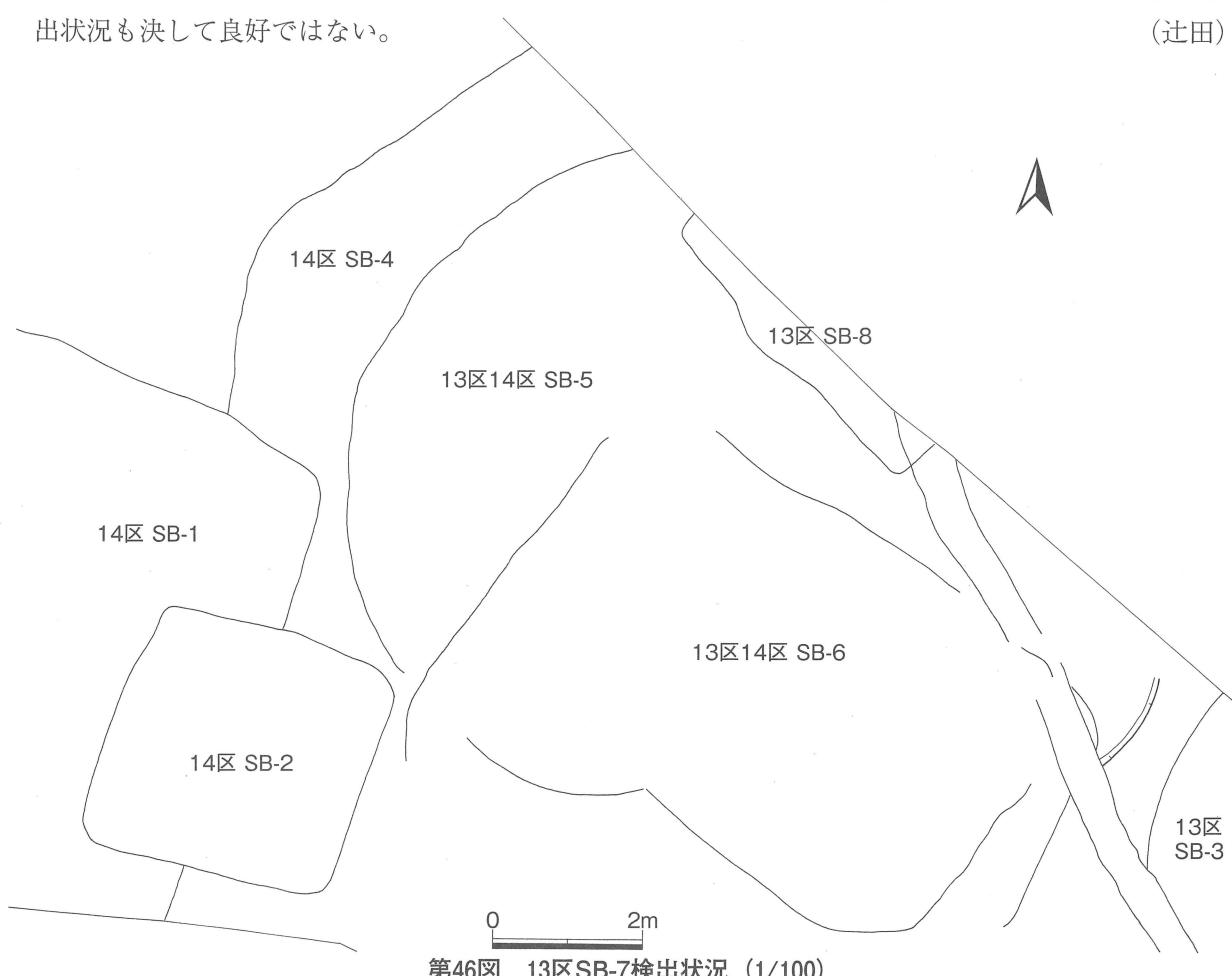
これまで紹介してきた4軒の重なり合う住居跡は、当初の検出時は1つの巨大な遺構かとも思われるほど各住居跡内の土層は酷似している。したがって、本来の遺構検出面からはかなり下がった時点での検出となっている。また、各住居跡の出土遺物の内容についてもそれほど大きな時期差を見出すことは難しく、土層の対比からも出土遺物の対比からもこれらの住居跡がかなり短期間に形成・展開されたことが予想される。

(辻田)

一遺物出土状況一

次頁の第47図に遺物の出土状況を図示している。いずれも破片資料が散見される状態であり、住居廃絶時及びその後に流入したものと考えられる。第46図や第47図でも判るとおり、住居跡の切り合い関係以外にも後世の溝や土坑（図には掲載なし、第47図の遺物空白部分）に切られており、遺物の検出状況も決して良好ではない。

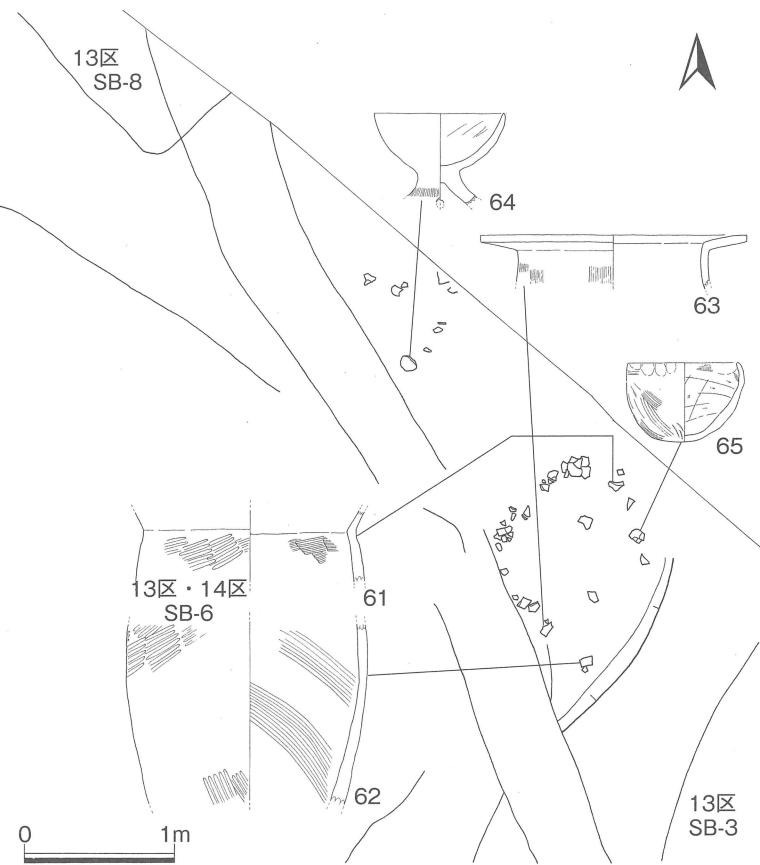
(辻田)



第46図 13区SB-7検出状況 (1/100)

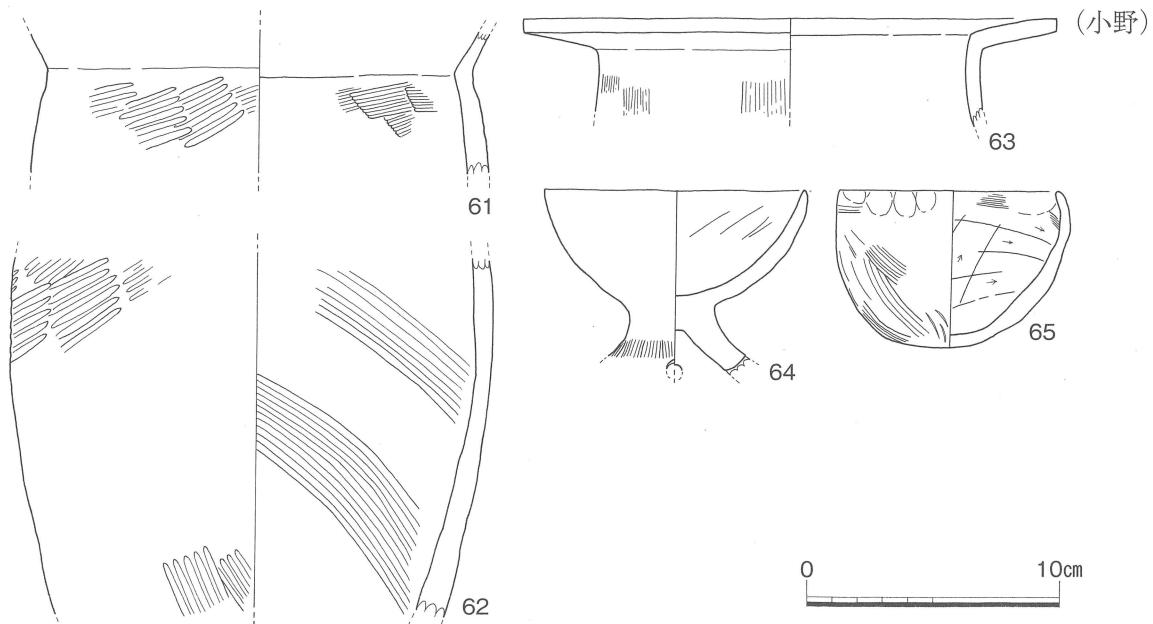
一出土遺物一

甕・小型土器(第48図)：下図はSB-7から出土した遺物で、接合で器形がよく分かるまでに復元できたもの4点を集め図示したものである。61・62は台付甕の口縁部と胴部の破片資料である。この二つは傾きや調整が非常によく類似していることから同一個体と考えられる。61は頸部から胴部上位が残っており、62は胴部上位から下位が残っている。61は口縁部が若干残っているが、口唇部が欠損しているため口径などは判然としない。胴部は張っておらず、頸部は締まりが若干甘い。口縁部は残存している部分から推測すると、短く外反し、若干開くと思われる。外面は口縁部直下にタタキが見られ内面はケズリとハケを施している。62は胴部で復元最大径は18.4cmである。胴部外面にはタタキ痕が見られ、下方はハケ



第47図 13区SB-7遺物出土状況 (1/50)

後にナデである。内面は斜位のハケを施す。63は甕の口縁部から胴部上位が残っている。口縁部は逆L字状で、口縁端部は綺麗に面取りし断面方形を呈す。口縁部は内・外面ともに横位のナデで整えている。胴部外面は縦位のハケ後に横位のナデである。内面は全体的にナデを施している。64は小型の台付鉢である。鉢部は碗の様な形態を呈し、ほぼ完形にまで復元できた。脚台部は若干残っており、短めの脚台部が付くと考えられる。外面は鉢部がナデられており、また、指頭圧痕が残る。脚台部には縦位のハケ、孔が穿孔されていた痕跡がある。内面は鉢部も脚台部もナデである。65は小型の浅鉢である。残存率約1/2。口縁部はやや内湾しており、底部は安定が悪く傾いた丸底である。外面は、ハケ後にナデ、口縁部には指頭圧痕が残る。内面は、口縁部が指頭圧痕、その下はナデ後にケズリである。



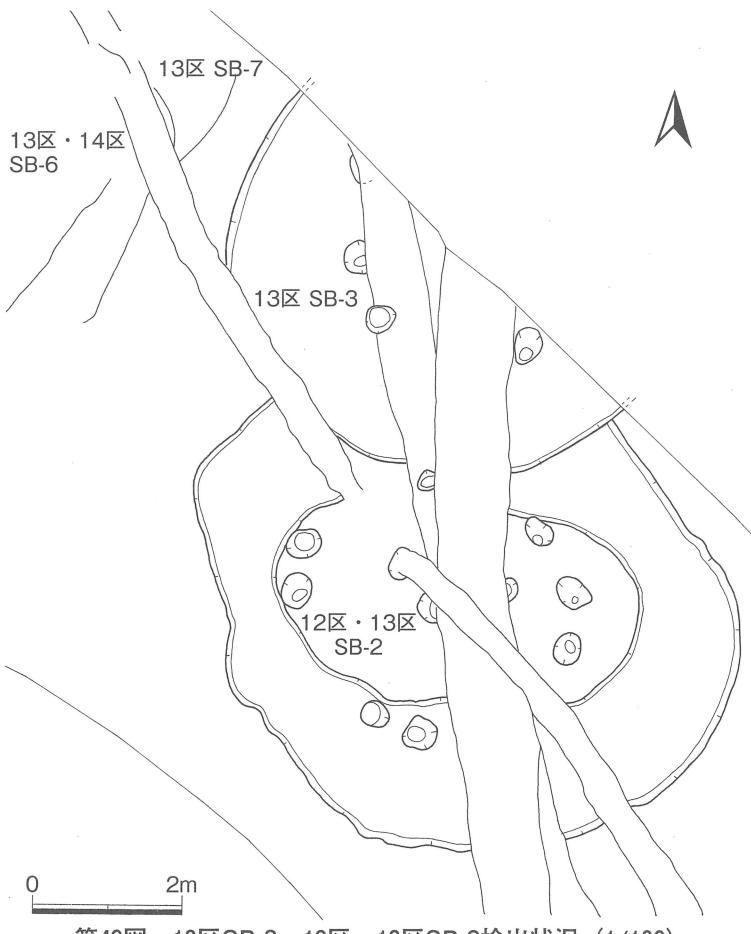
第48図 13区SB-7出土土器 (1/3)

⑤ 13区SB-3、12区・13区SB-2（第49図～第53図、図版4～5・図版12）

一検出状況一

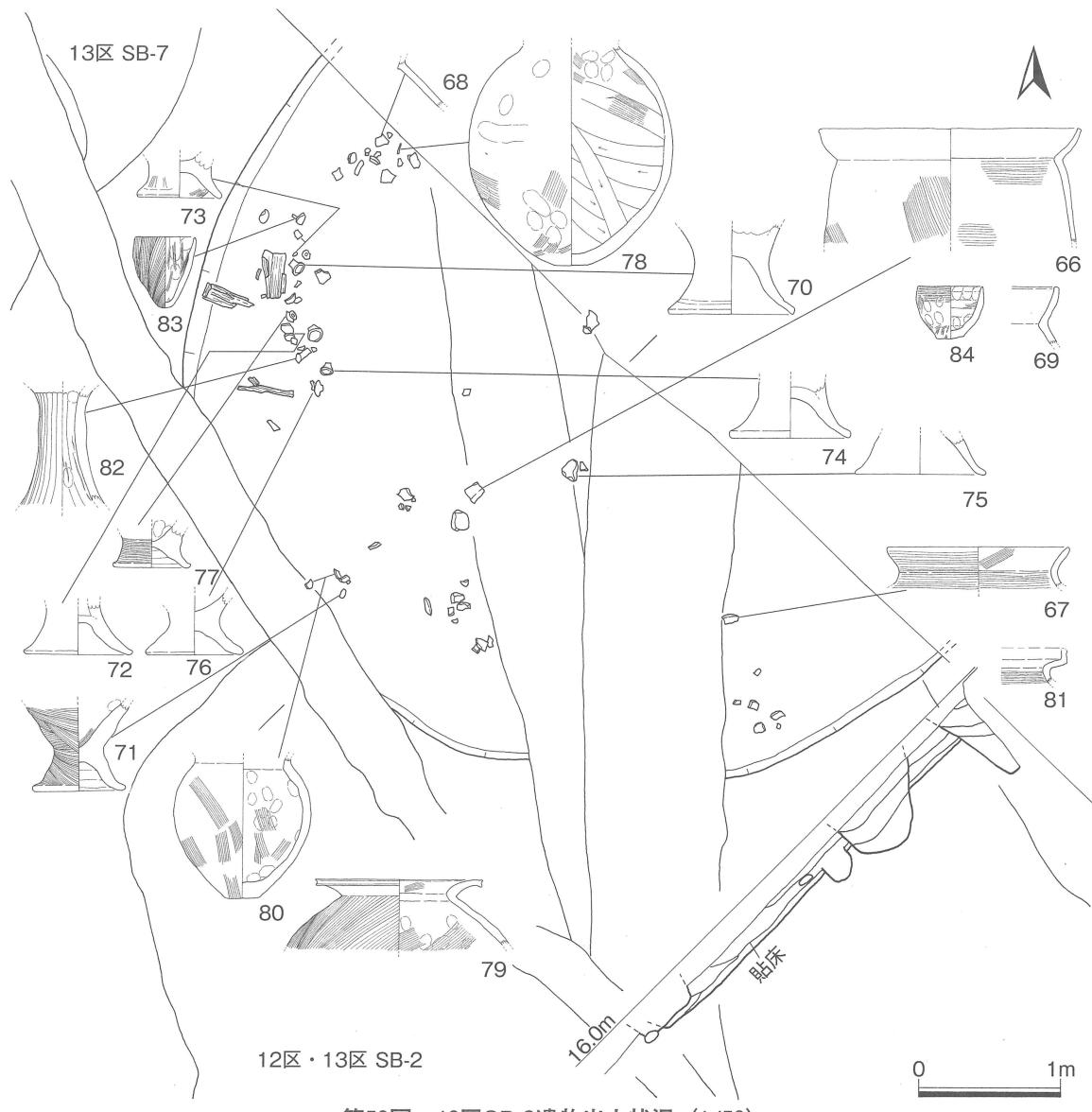
これまで紹介してきた住居跡群から若干東側に離れた位置に検出されている。円形の住居跡が2軒重なり合った状態で検出されており前後関係は一目瞭然である。後世の溝3本が交差する地点であり、また、削平も一段と進んだ部分であったため、12区・13区SB-2は住居の立ち上がりが辛うじて残存する状況であった。

先行する住居跡である12区・13区SB-2は、平面形状がややいびつな楕円形となるが、厳密には幅1m～1.5mのリング状の溝状遺構である。長軸7.5m、短軸6mを測る。遺構の立ち上がりは数cmを測る状態で、おそらく住居の床面下まで削平されているものと考えられる。龍王遺跡西隣の佃遺跡では、弥生中期後半～後期前半の住居跡ではあるが、直径10m前後の円形住居跡の張り床下に、幅1mほど、深さ20cmほどの溝状遺構が住居立ち上がりに沿うようにリング状に検出されている。それと同様のものであろうか。遺物の出土が見られず時期がつかめないが、そうであるとすれば現在の平面形状より一回り外側に本来の住居立ち上がり部分があったと考えられる。直径9m近い円形の住居跡となろうか。佃遺跡では円形の住居跡のほぼすべてに張り床下の溝状遺構が検出されているが、龍王遺跡の円形住居ではこの12区・13区SB-2のみで見られる。断定はできないが、弥生中期後半～後期前半まで遡ることのできる遺構の可能性もある。住居内に見られるピット状遺構は円形に巡っており、住居に伴う柱穴と考えられる。ピット状遺構の中で後世の溝状遺構内に見られるものは、溝底部等に掘り込みが残存していたものであり、後世の溝状遺構完掘後に検出されたものである。後述する13区SB-3のピット状遺構も同様である。ちなみに佃遺跡でも住居内の柱穴は住居平面形状と同様に円形に巡るものであつた。



第49図 13区SB-3、12区・13区SB-2検出状況 (1/100)

後出する13区SB-3は、その半分が調査区外に広がっているため断定はできないが、平面形状は径6mほどのきれいな円形を呈すものと考えられる。今報告書で報告する弥生時代住居跡の中では最も小さいサイズである。第50図に示す断面図でも判るとおり、深さ20cm程が検出されており、張り床と考えられる痕跡が確認されている。張り床の土は明灰褐色の粘質土で、厚さ5cmほどである。炭化物や黒褐色土の粒を混入する。ピット状遺構も住居平面形状に並行するように円形に検出されており、住居跡に伴う柱穴と考えられる。断面図中央に見られる柱穴は土層の堆積状況から、柱が抜き取られ、開口した状態で住居が埋没した様子を示しており、住居廃絶時には柱材等をきれいに片付けていることが推測さ



第50図 13区SB-3遺物出土状況 (1/50)

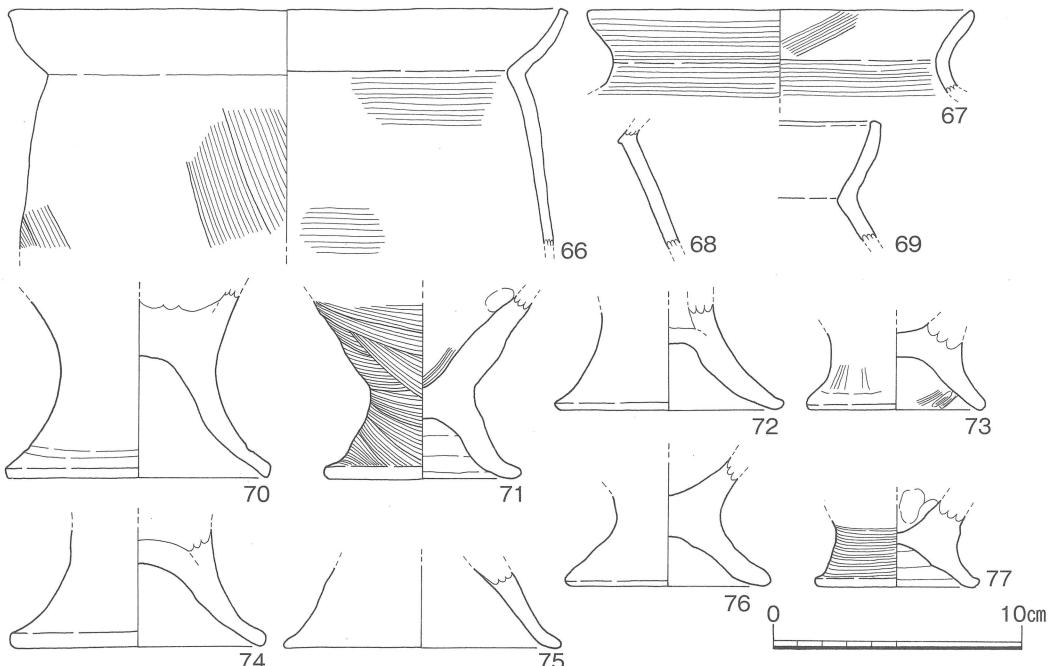
れる。先行する12区・13区SB-2に見られるような張り床下の溝状遺構は検出されていない。住居跡内の埋土の土色はこれまでとは大きく異なり、やや灰色を帯びており、遺構検出の際には一見して違いがわかる。これまでの住居群とは時期の異なるものであろうか。

(辻田)

一遺物出土状況一

上第50図に遺物の出土状況を図示している。いずれも破片資料であり、完形に復元可能な土器は検出されていない。住居廃絶時及びその後に流入したものであろうか。住居西側には炭化材の検出も見られるが、焼失住居と考えられるような出土状況を示すものではなく、張り床上に堆積した土層の上面から検出されている。遺物についても張り床の直上からの検出よりも、張り床上に堆積した土層の上面より多くの遺物が検出されており、廃絶後の遺物の入り込みをあらわすものであろう。後世の溝状遺構に大きく削平されており、住居中央部分の状況は不明だが、住居立ち上がりに沿うように遺物が検出されているようだ。また、前述した柱穴の土層堆積から推測される、住居廃絶時の柱材の抜き取りなどから、住居廃絶の際に再利用可能な柱材は持ち去り、住居床面はきれいに片付けられた状況が考えられる。その後不要物となった土器片と共に住居内に土を入れ込んだため、住居立ち上がり付近に遺物が集中する状況が作り上げられたものであろう。

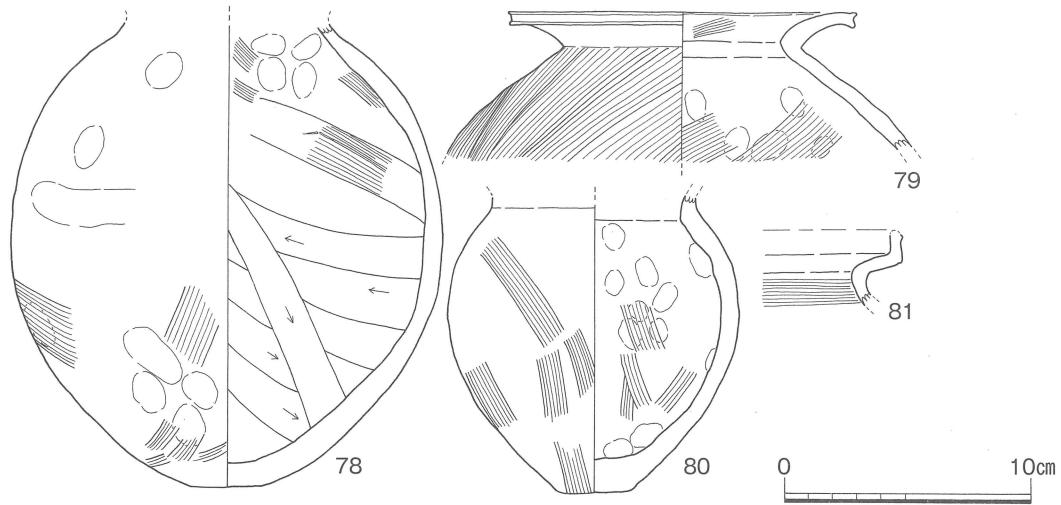
(辻田)



第51図 13区SB-3出土土器（台付甕）(1/3)

一出土遺物一

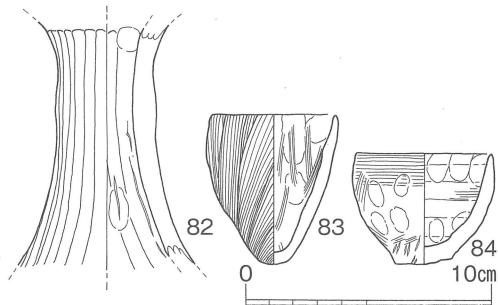
台付甕（第51図）：66～69は甕部分の破片、70～77は脚台部片である。66は口縁部から胴部中位までが残っている。胴部はあまり張っておらず、台付甕特有のスリムな器形を呈している。頸部の締まりはよく、頸部内面にはしっかりと稜線を作る。口縁部は短く内湾し、口唇部端は断面方形で、大きく外側に開いている。口縁部は内・外面ともに丁寧な横位のナデで整えている。しかし、器壁の残存状況が悪くはっきりしないため部分的にしか確認できない。67は甕の口縁部から頸部である。口縁部はなだらかに外反しており、口唇部端で丸くおさめている。内・外面ともに横位・斜位のハケを施している。68は頸部から胴部上位にかけて残存している。小破片のため判然としないが、外面は横位のナデと縦位のハケ、内面は横位のナデを施している。69は口縁部から頸部が残っている。こちらも小破片で器壁の残存状況が悪く、はっきりとは判断できないが、口縁部はゆるやかに内湾しており、ほぼ直立に近い。内・外面ともに横位のハケを施している。70～77の脚台部片は全体的に器壁の残存状況が悪く、調整が判然としないものが多かった。全てにおいて、胎土に含まれる粒子が大きく多量で、角閃石が最も多く含まれている。このことから、これらの台付甕の脚台部は島原半島の在地系のものであることが言える。台裾部が一番広がっているものは75の11cmで、内面は横位のナデ、外面は縦位のナデを施している。70・72・74・76は内・外面ともに横位のナデを施している。70は外面の裾部分に1条の溝があり、外面には横位のハケが見られる。72と76は外面に鉄分が付着している。74は横位のナデの後に横位のハケも施している。76は他と違い、色調が黒く、よく火が当たっていたことが分かる。台裾部外面は横位のハケである。71・73・77は調整がよく確認できた。71の外面は斜位のハケで、鉄分が付着しており、脚台部内面は縦位のハケ、甕底部内面はケズリの後に指頭圧痕・ナデを施している。胎土には植物が混ざり、そのまま土器焼成時に焼けた痕跡と思われるものも見られる。73の内面は横位のナデの後に横位のハケ、外面は横位のナデの後にハケを行っている。77の甕底部内面はケズリと指頭圧痕で、脚台部内面は横位のナデの後に横位のハケを施している。外面は横位のハケで綺麗に仕上げている。同じ住居跡から出土したが、台付甕の脚台部と甕の部分が接合できるものや、接合はできなくても同一個体と考えられるものは残念ながら見つけることはできなかった。



第52図 13区SB-3出土土器（甕・壺）(1/3)

甕・壺（第52図）：78は頸部から底部までが残る甕で、胴部は丸くなつており、最大径は胴部中位部分に来る。底部は平底で小さく、底部を下にして焼いたのか底だけ黒くなつてゐる。胴部外面には指頭圧痕と横位のナデが多く残り、下半は縦位のハケ、口縁部と底部付近は横位のハケを施してゐる。胴部内面は不定方向にハケを施しており、底部にはケズリの際に動いた小礫の痕跡が明瞭に残つてゐる。頸部に指頭圧痕が多く、下から摘み上げて口縁部を作つてゐる。この土器に使われたハケは目が細かい。79は壺の口縁部から胴部上位で、頸部は強く締まっており、口縁部は大きく外側に開いてゐる。胴部最大径は中位にくる。外面は斜位のハケ、内面は指頭圧痕・ナデ後斜位のハケ、頸部から3cm下まではミガキである。口縁部は内・外ともに横位のナデを施してゐる。80は甕の頸部から底部までが残つており、78の甕と残存状況が非常によく似てゐる。底部は小さい平底で胴部は丸く、口縁部は欠損してゐる。胴部最大径は胴部中位で11.6cm。外面は横位のナデ後斜位のハケ、内面は指頭圧痕の後斜位のハケである。外面のハケに比べて内面のハケは目が粗い。内面に強めの指頭圧痕が明瞭に残る。81は二重口縁壺の口縁部の破片資料である。わずかに口唇部が欠損してゐる。頸部は締まりがよく、1次口縁が外反しており、その上に直立した2次口縁が付く。小破片のため判然としないが、内・外ともに横位のハケ後横位のナデを施す。

高坏・鉢（第53図）：82は高坏の脚柱部の破片資料である。径は脚柱の中位辺りで4cmと非常に細い。胎土に粒子がほとんど含まれず、かなり精製されている。内面はケズリ後ナデ、外面はケズリ後ミガキを施し暗文状にしている。83と84は鉢である。どちらも残存率は50%。口縁部から底部の器壁の厚さがほぼ同じで、下から口縁端部に向かって摘み上げているために指頭圧痕が明瞭に残り、手捏ね土器であることが言える。手捏ねだが口縁部は水平にできてゐる。83は器高が6cmの小型深鉢。底部は平底だが安定が悪い。器形はとても細身である。外面は縦位のハケ、内面は下から上に向ってナデ後に縦位のハケを施してゐる。内面には亀裂が生じた痕が明瞭に残つてゐる。84は器高4.4cmの小型浅鉢である。底部は平底で若干高台の様に作つてゐる。胴部外面は横位・縦位のハケの後に指頭圧痕、下方から底部にかけて斜位のハケを施してゐる。内面は横位のハケ後に横位のナデ。指頭圧痕が明瞭に残る。



第53図 13区SB-3出土土器（高坏・鉢）(1/3)

(小野)

⑥ 14区SB-1 (第54図～第59図、図版12～13・図版29)

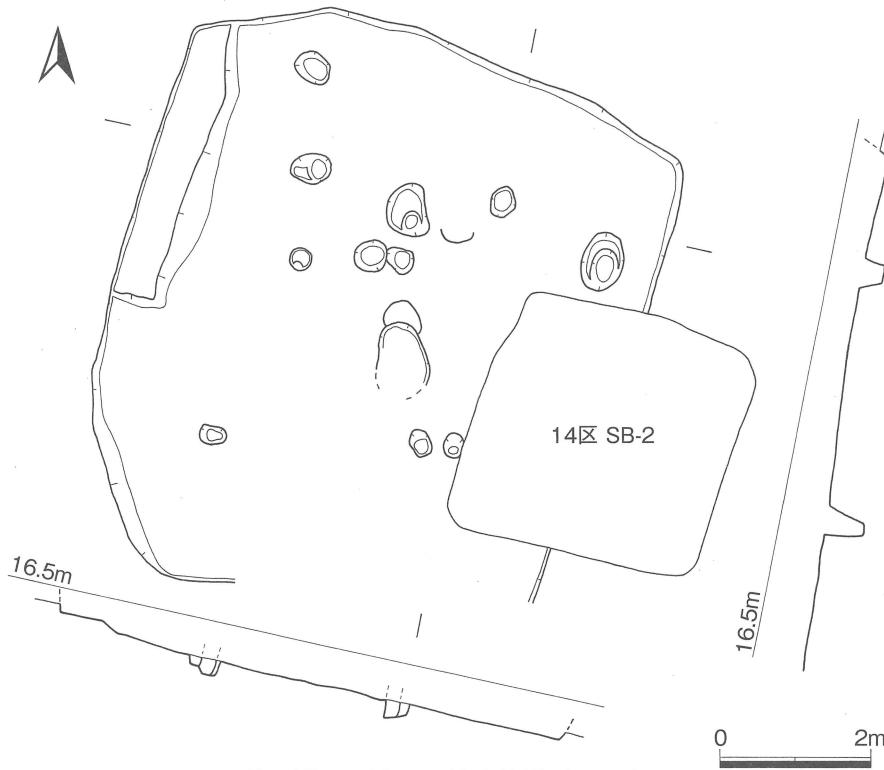
一検出状況

14区SB-4を切り込むように検出され、14区SB-2には切られる格好となっている。住居跡の一部が若干調査区外に広がっているが、ほぼ全体の形状が確認できる。若干歪はあるが、ほぼ正方形に近く、北側の立ち上がり部分がやや張り出し、南西隅のコーナーが西側に曲がりこむ形状となっている。南北7.5m、東西7mを測る。先に紹介している13区・14区SB-6に近い規模である。住居の立ち上がりは古代以降の削平でかなりの部分が消失しているが、10cm～15cmが残存している。住居中央部分には焼土の痕跡があり、炉跡と考えられるが、それほど顕著なものではない。住居西側の壁面の直下には幅50cm、長さ4mほどの段差があり、ベッド状遺構と考えられる。断面図に示したとおり、住居跡に伴うであろう柱穴が検出されており、径20cmほどの柱痕跡も見られる。住居の大きさに比べると柱穴が浅い印象を受ける。断面図に示した3基の柱穴は住居の平面形状に沿うように検出されているが、南西隅の柱穴についてはやや外側にずれた位置で検出されている。13区・14区SB-6も同様の柱穴が存在すると考えられる。柱穴と考えられるもの以外にもピット状遺構を検出しているが、住居跡に伴うものかどうか不明である。住居内の土層堆積については図示していないが、張り床状遺構と考えられるような痕跡は見られない。また、床面であろうと考えられるような硬化面も検出されていない。南北の住居跡断面図では南側に緩く傾斜するような格好となっているが、はっきりとした床面が検出されなかつたため掘りすぎている可能性がある。

(辻田)

一遺物出土状況

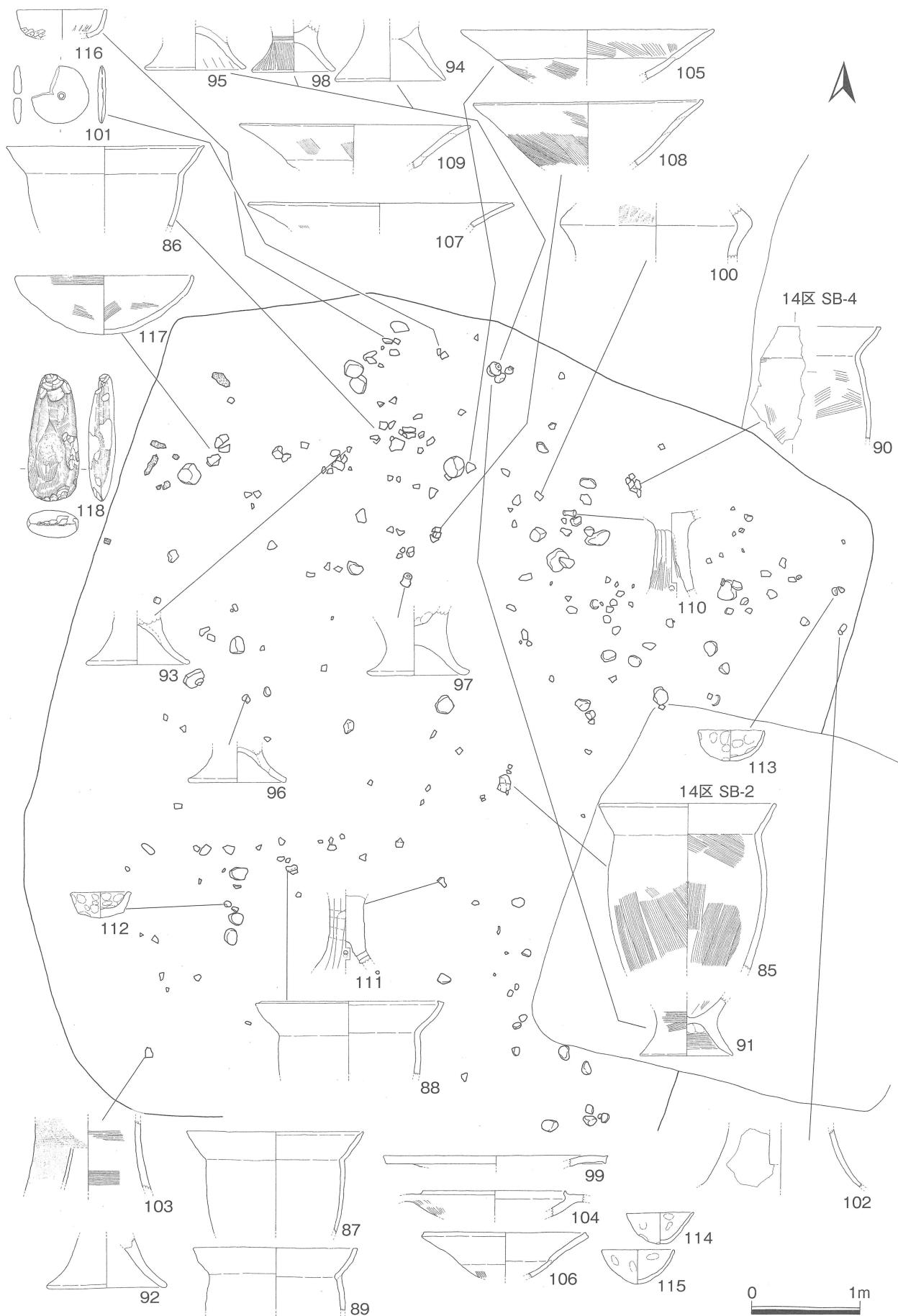
右頁第55図に遺物の出土状況を図示している。いずれも破片資料ばかりであり、完形に復元可能な土器は検出されていない。住居廃絶時及びその後に流入したものであろう。住居北西側隅には炭化材の検出も見られるが、消失住居と考えられるような出土状況を示すものではない。土器片と共に多くの礫が散見されており、廃絶時に入れ込まれたものであろうか。また、最も北側には台付甕の脚台部分ばかり4点集中して検出されており、住居廃絶時に不用物と一緒に捨てている状況が見受けられる。



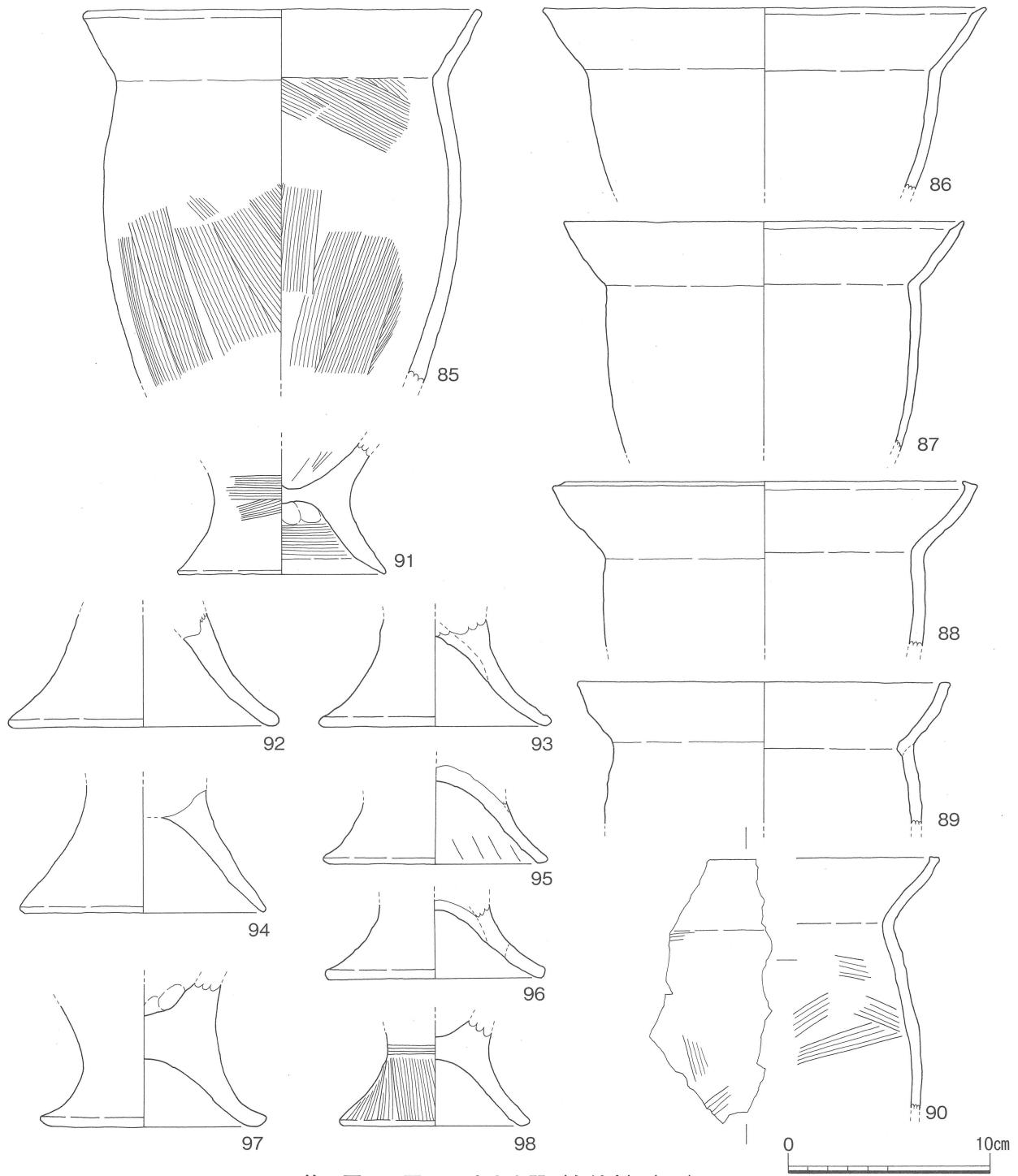
第54図 14区SB-1検出状況 (1/100)

遺物の出土や礫の出土は北側半分に多く見られる。当調査区付近は南側に向かって地形が傾斜しており、廃絶後の埋め戻し、あるいは自然な土砂の流入も北側から行われたことが予想される。南側に礫が多く見られる部分は、南北の断面図説明の際にも記述したが、床面下まで掘り込んでいる可能性があり、床面下の自然礫を実測しているものもある。

(辻田)



第55図 14区SB-1遺物検出状況 (1/50)



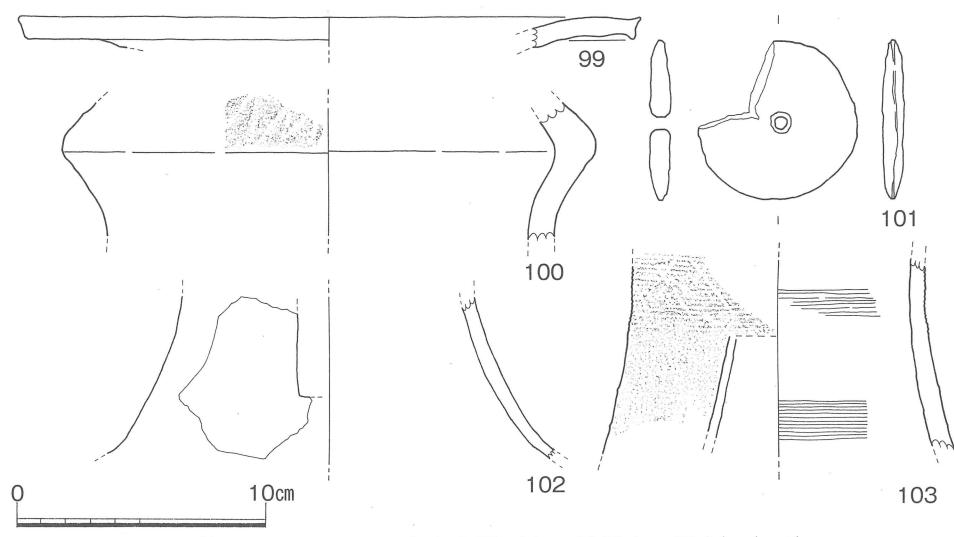
一出土遺物一

台付甕（第56図）：85～90は台付甕の口縁部の破片資料で、いずれも、破片が小さく口縁部から胴部中位までしか残存していない。台付甕特有に胴部はあまり張っておらず、細身で、ほとんど器形・口径・大きさが同様である。復元すると中型の台付甕になるようだ。胎土には角閃石・石英を多く含むため本地のものである可能性が高い。85は復元口径が19.6cm。頸部の締まりが甘く、口縁部が若干外反している。口縁部は内・外面ともに横位のナデを施している。胴部外面は縦位のハケ後に横位のナデ、胴部内面は頸部下が斜位のハケ、下方が縦位のハケ・ケズリを施している。86は復元口径が21.8cm。口縁部が内湾し、口唇部端は内側に向って斜めに下がっている。口縁部は内・外面ともに

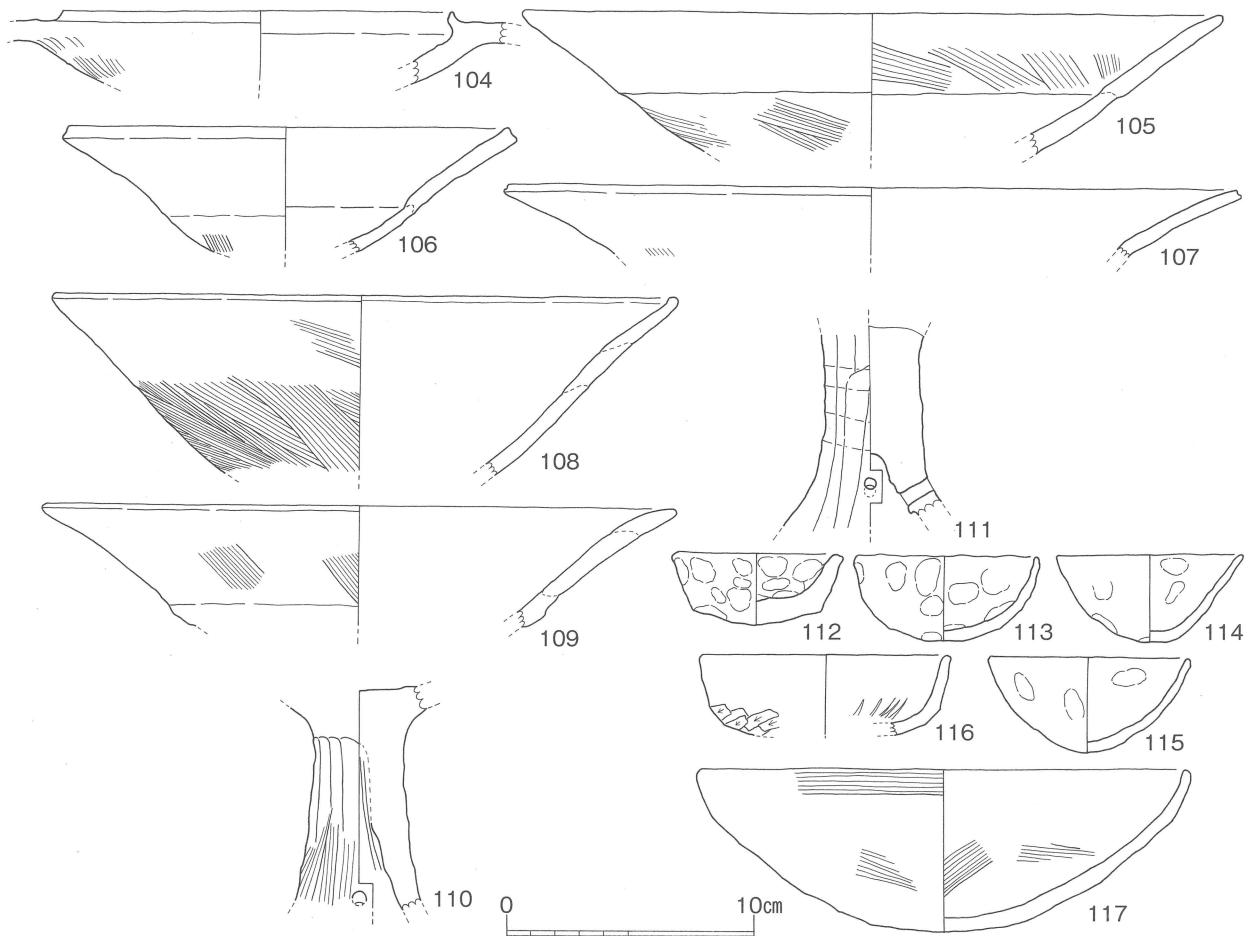
横位のナデを施し、胴部は器壁が剥落しており判然としない。87は復元口径が19.7cm。86と同じく口縁部は内湾し、口唇部端は内側に向って斜めに下がっている。全体の器壁が摩滅しており調整は不明である。88は復元口径が20.8cm。頸部の締まりがよく、内面には稜線がしっかりと残っている。口縁部は内湾しており、端部は断面方形で綺麗に面取りされた後ナデによって中央をくぼませ、内側に向ってつまみ上げている。口縁部は内・外面ともに横位のナデを施す。89は復元口径が18.4cm。口縁部が内湾しており、内・外面ともに横位のナデである。頸部付近に口縁部と胴部を接合した痕跡が残っている。90は復元口径が14.2cm。口縁部が内湾しており、端部は水平である。頸部は締まりがよく、他のものにくらべて口縁部径と胴部最大径とはあまり差がなく同じになるようである。口縁部は内・外面ともに横位のナデで、胴部には不定方向へのハケの後にナデを施している。91～98は台付壺の脚台部の破片資料である。脚台部は分厚く作られており残りやすいのであろう、完形に近く残存している。最も台裾部径が大きいものは92の13.3cmで、小さいのは98の9.3cmである。全て胎土に角閃石・石英・白色粒子を多く含んでいる。92～94・96は台裾部端部を丸く仕上げており、内・外面ともに横位のナデである。95は内・外面ともに横位のナデであるが、内面裾部のみヘラ状工具による調整が行われている。91・97・98は壺部分の底面も残存している。91は底部内面がヘラ状工具による調整が行われており、壺と接合部分は横位のハケが施されている。脚裾部内面は指頭圧痕が残り、その下は横位のハケを施している。壺底部外面上には被熱による赤色化が見られる。97は裾端部を上に跳ね上げている。底部内面に指頭圧痕が残り、外面は壺と脚台部接合部分にのみハケの後にナデで、その他の部位は横位のナデを施している。98は小型の脚台部と思われる。外面には壺と脚台部接合面辺りに横位のハケ、その下が縦位のハケを施している。台裾部径が10cmを越すものは調整があまり行われていない。

壺・紡錘車・器台（第57図）：99は壺の口縁部の破片である。復元口径は24.8cmで、非常に外反しており、口縁端部は断面方形で綺麗に面取りされ、その上から横位のナデで綺麗に整え中央を若干くぼませている。内・外面ともに横位のナデを施している。100は複合口縁壺の口縁部である。口縁部は袋状になっている。頸部からは外反し、逆「く」の字状に曲がって内湾する。口唇部・頸部から下は欠損しておりよく分からない。内・外面ともに横位のナデである。口縁部が内湾した部分の外面には貝殻腹縁圧痕が施されている。101は土製の紡錘車である。残存率は約3/4で、残存状況がよい。径が6.3cmで比較的大型。厚さは0.8cmで、中心部と周縁部の厚みがほとんど変わらない。中心孔は径0.7cmである。全面ナデを施している。胎土には角閃石・石英・白色粒子を含む。102・103は器台の裾部の破片資料である。102は長方形の透かしが入る。器壁が剥がれており、調整などは判然としない。

103は中央の最もくびれた部分に14本の箇描直線文があり、その上から×印がヘラ書きされている。バチ状の透かしが4ヶ所入っており、上端は沈線文直下となる。内面は横位のハケの後ナデを施す。



第57図 14区SB-1出土土器（壺・紡錘車・器台）（1/3）



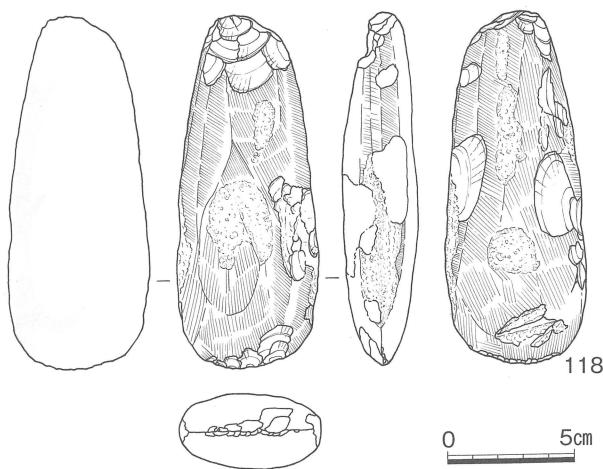
第58図 14区SB-1出土土器（高坏・鉢）(1/3)

高坏・鉢（第58図）：104～109は高坏の坏部で、その中でも 104～107・109は有段のもの、108は段がないものと分けることができる。104は口縁部屈曲部分の破片資料である。口縁部・脚台部は欠損しており判然としないが、おそらく鋤先口縁が長く垂下したもので、坏部は浅くて扁平で、細身の長い脚柱部が付くと思われる。内・外面上ともに横位のナデが施されている。外面はその後に、段の部分には斜位のハケ、その下に縦位のハケを施している。105は復元口径が28cmを測る。口縁部は斜め上に伸びており、坏部下半との接合面が明瞭に確認できる。坏部外面は横位のハケの後に横位のナデ、坏部下半は横位のナデの後に斜位のハケを行っている。内面は、斜位のハケの後に横位のナデを施している。106は小型の坏部で、復元口径が18.4cmを測る。有段のものの中では深めである。口縁部は外反しており、器壁が非常に厚い。口唇部端は断面方形を呈し、ナデで整え、中央部分をくぼませている。外面には坏部と坏部下半を接合した部分が明瞭に残り、内面は接合部分が分からなくなるように丁寧にナデ消しを行っている。内・外面上ともに横位のナデで、坏部下半外面にはその上から斜位のハケを施している。107は復元口径が29.4cmを測り、図示した中ではおそらく一番大きな高坏になるだろう。坏部下半は欠損しており不明。口縁部は外反し、端部は断面方形を呈し、ナデにより綺麗に整え、中央部分をくぼませている。内・外面上ともに横位のナデで、坏部下半外面はその上から斜位のハケを施している。108は復元口径が25.5cmを測る。坏が深めの高坏で口縁部は若干外反し、端部は内側に丸くおさめている。明瞭な段や稜線は見られないが意識はしているのか、口縁部半分の部分で内側が若干肥厚している。3段階に渡り接合を行い作っている痕跡がある。内面は縦位のケズリの後に横位のナデを施している。外面は横位のナデ、下方は横位のナデの後に縦位のハケを施している。

109は復元口径が25.4cm。口縁部は外反しており、外側に開いている。口縁部を坏部下半に接合し、そのまま上につまみ上げて口唇部端を作っているようである。内面は縦位のナデ、外面は縦位のハケ後に縦位のナデを施し、最後に口縁端部を内・外面ともに横位のナデを施して綺麗に整えている。110・111は高坏脚柱部の破片資料である。どちらも細身で長くなり、脚柱部と台裾部の境目辺りには4ヶ所の丸い小さめの透かし孔が穿孔されている。110は残存高が8.4cmである。内面にしづら痕が明瞭に残っており、その下には指頭圧痕を行っている。外面はケズリで、下方にはケズリの後に縦位のハケを施している。111は残存高が8cmである。脚柱部分が中実であり、外面はしづらを行った後に、縦位のケズリを施している。その後、縦位のナデによって綺麗に整えられている。内面は不定方向へのナデで整えられている。外面には若干ではあるが、丹塗りの痕跡が残る。112～115は手捏ねの小型浅鉢である。下から上に摘み上げて作っており、縦位のナデを施した後に口縁部には横位のナデを施し、全体に指頭圧痕が明瞭に残っている。これらの調整痕が明瞭に残っているため手捏ね土器であることが分かる。胎土には角閃石・石英・白色粒子が多く含まれており在地系か。112～115は復元口径が8.5cm以下、器高が4cm以下である。いずれも口縁部で内湾しており、器壁は薄く、底部が112・113は丸底、114・115は全体が「V」の字型の尖底である。112は他の3つと若干違い、口唇部端は断面方形で、器壁は厚くできており、底部は丸底ではあるがやや角ばった作りになっている。116は大型の浅鉢である。復元口径は10cmを測り、残存高は3.2cmである。口縁部は直立しており、口唇部端は外側に丸くおさめている。底部は欠損しているので判然としないが、おそらく平底である。底部外面をケズリ、口縁部は内・外面ともに丁寧な横位のナデで整えている。底部付近の内面にはミガキを施している。117は大型の浅鉢である。復元口径が19.2cm、器高が6.5cmを測る。底部は丸底で、口唇部で若干内湾して、端部は丸くおさめる。胎土に混入する粒子が多いが、その中でも角閃石・白色粒子が非常に多く含まれており、島原半島で作られた可能性が高い。内・外面ともに不定方向へのハケを施した後に、その上から丁寧なナデによって綺麗に仕上げを行っている。

(小野)

石器（第59図）：118は地元産出の角閃石安山岩を素材とする磨製石斧である。均整のとれた形状で最大幅は刃部側にある。長さ13.85cm、幅5.6cm、厚さ3cmを測る。重さは321.7gとずしりと重い。全体に粗い調整を施した後に全面に丁寧な研磨を施している。刃部は弧状に張り出すような形状で、非常にきれいに作り出してあり、側面形状及び刃部側からの観察でも両刃状に一直線の刃部が観察できる。刃部表裏面に見られる小剥離は使用によるものであろう。基部側にもやや大きめの剥離が見られるが、端部には敲石等に使用したと考えられる打撃痕が見られ、基部側の剥離は打撃により剥落したものと考えられる。実測図網掛け部分は顕著な磨き痕が見られ、他の部分に比べると茶色に変色している。研磨具として使用していた痕跡であろうか。以上のように、この磨製石斧は、石斧としての使用のほかに、基部は敲石等の打撃具として、胴部は磨き具としての使用がみられ、複合石器的な使用のあり方が見られる。また、胴部最大径部分の上には若干くびれるような加工痕が見られ、着柄等の痕跡であろうか。（辻田）



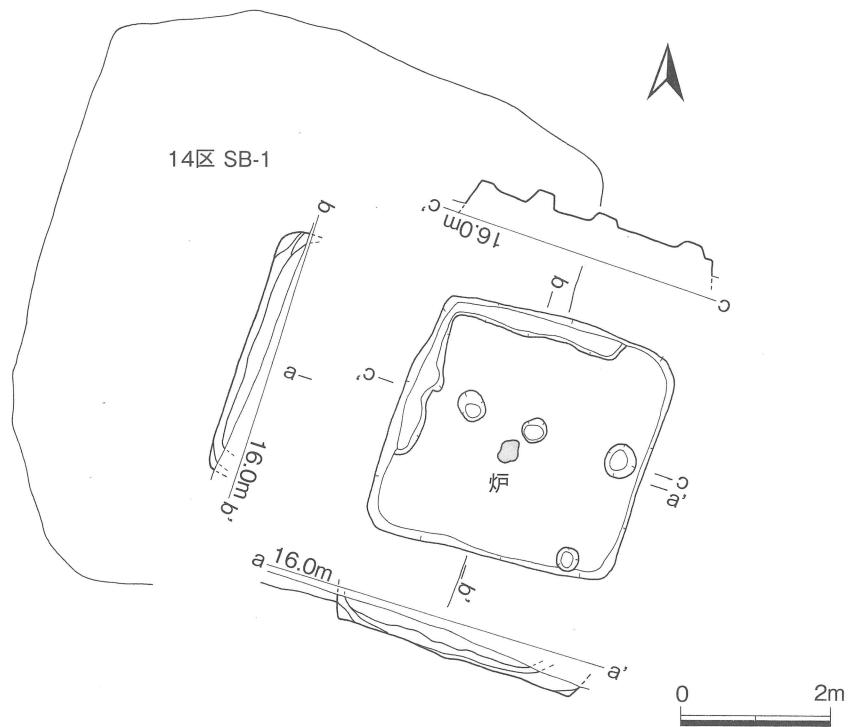
第59図 14区SB-1出土石器（磨製石斧）(1/3)

⑦ 14区SB-2（第60図～第67図、図版5・図版14・図版29）

一検出状況一

14区SB-1を切り込むように検出され、後出するものである。当調査区では唯一全体の形状が確認できる住居跡である。平面形状は一辺3.4mの正方形で、これまでの住居跡に比べるとかなり小さい印象を受ける。住居の主軸は先行するSB-1と同じ向きである。住居の上面は古代以降の削平で消失しているが、住居西側では30cm、東側でも20cmの立ち上がりが確認できる。貼床、もしくは床面と考えられる硬化面は検出されていないが、床面と考えられる部分の中央に炉跡と考えられる焼土痕が検出されている。その他、住居跡北西側角に浅い溝状の遺構が住居壁面直下に検出されている。第60図のとおり全周するものではなく、先行するSB-1側のみである。このあたりの地形は、北側から南側にもともとの地形が傾いており、先行する住居跡の床面などを伝って、住居北西側壁面から雨水等が住居内に染み出していたことも予想されよう。だとすれば、北西側角のみしか溝状遺構が検出されない理由も成り立つが、壁面に雨水の染み出たと考えられるような、鋸状の痕跡等が検出されているわけではない。住居跡内の土層堆積は、住居跡立ち上がり直下に、壁面が崩落して堆積したであろう三角形の堆積等が見られる。また、床面直上に検出される遺物は比較的大きな破片であり、住居としての使用が終了した後、それほど時を空けずに埋め戻されたと考えられる。住居跡内の土層を除去後に柱穴の検出を行っているが、住居の対角線上には見つからず、東西方向に2箇所の柱穴を確認している。第60図の断面図は、床面から10cm程掘り込んだ状態であるが、柱穴の断面を示している。中央の炉跡の脇にもピット状のものが見られるが、本来の柱穴は両脇のものと考えられる。非常に浅いものであるが、先行するSB-1もそれほど深い柱穴が検出されているわけではない。住居の屋根をしっかりと支えるための柱穴とはイメージし難いが、床面から10cm程掘り下げたにも関わらず、これら以外は検出されないため、竪穴内側の柱についてはそれほどの深さを必要としていない、と考えざるをえない。このことは後述する龍王遺跡5区の古墳時代住居跡とは状況が異なり興味深い。

(辻田)

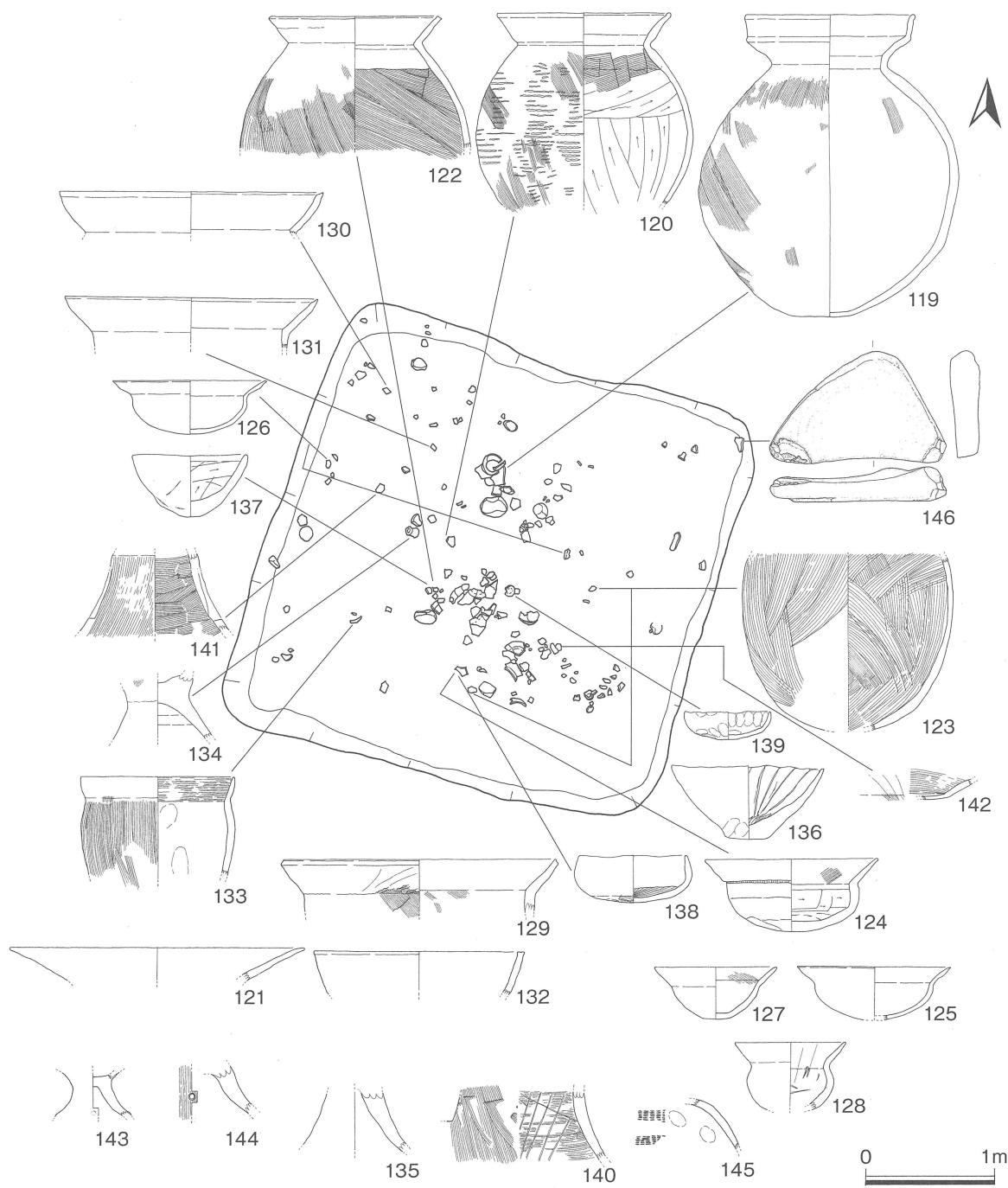


第60図 14区SB-2検出状況 (1/100)

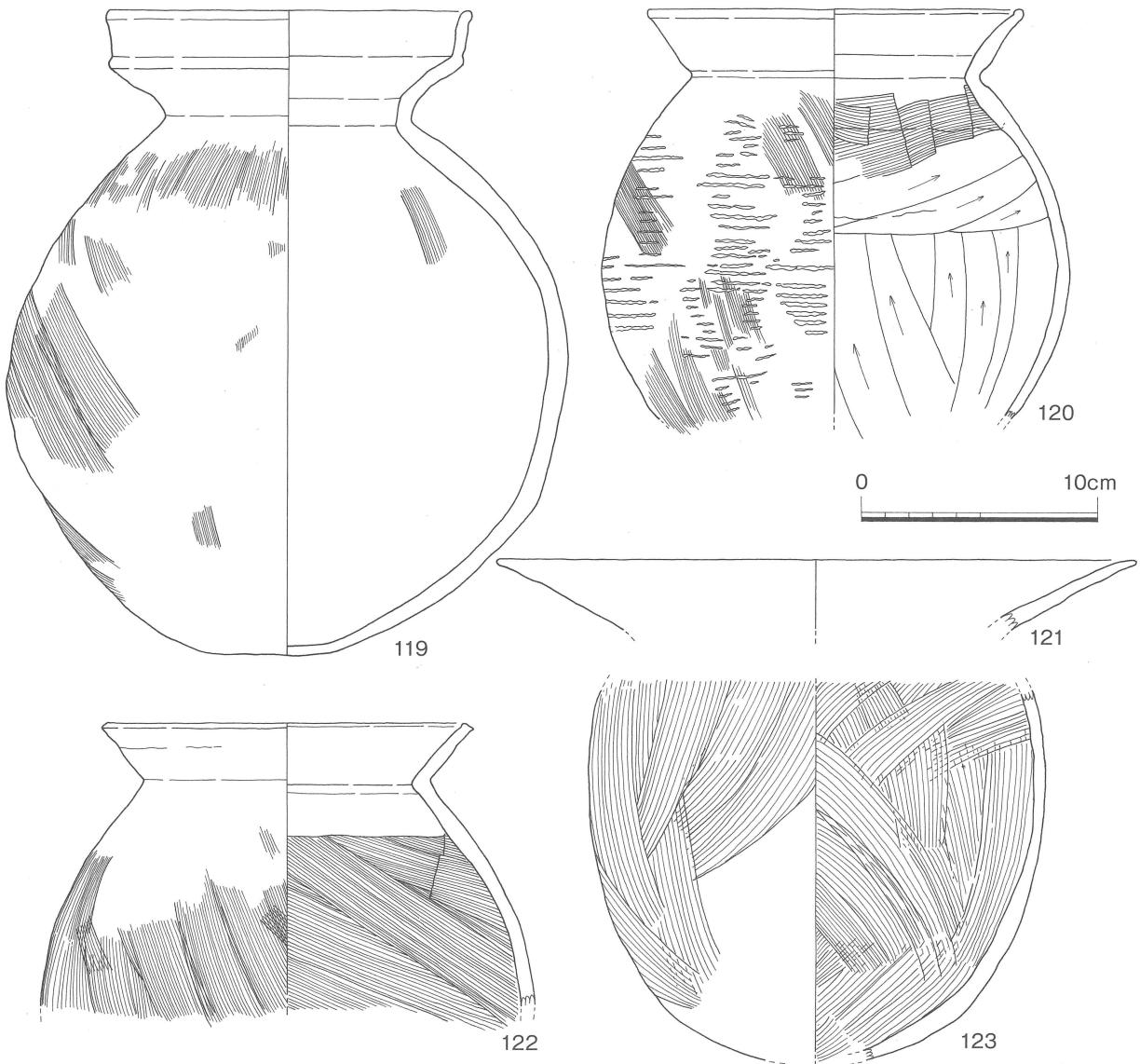
一遺物出土状況一

下第61図に遺物の出土状況を図示している。住居跡中央付近に見られる比較的大きな破片は床面直上で検出されており、完形に近いサイズまで復元可能なものも含まれる。それに対して、その周辺に散乱する破片資料は床面から浮いた状態で検出されており、住居を埋め戻す際の土の中に入っていたものと考えられる。中央部の大きな破片は住居埋め戻しの際に不用物として住居跡内に残されたものと考えられ、住居使用時に最も近い時期の遺物と考えられる。また、住居北東側角の住居壁面には第67図の砥石が張り付くように検出されており、14区SB-4で見られた砥石の検出状況と酷似する。住居壁面に吊るす等の収納を行っていたものであろう。このことからも、この住居跡が使用時に近い状況で埋め戻されていることが予想される。

(辻田)



第61図 14区SB-2遺物出土状況 (1/50)



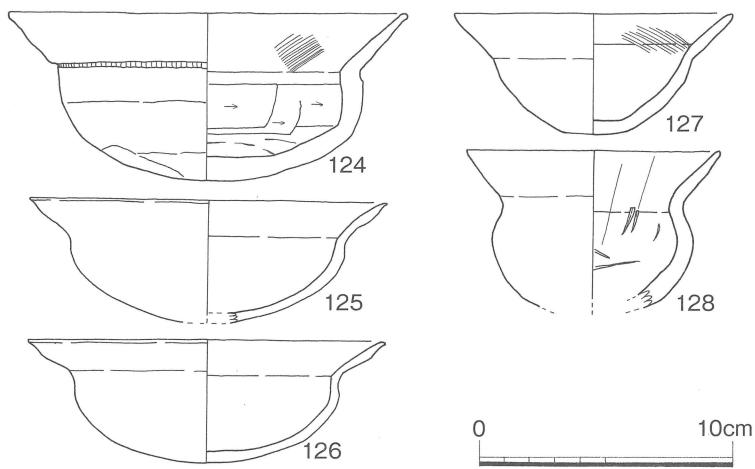
第62図 14区SB-2出土土器（壺・甕）(1/3)

一出土遺物一

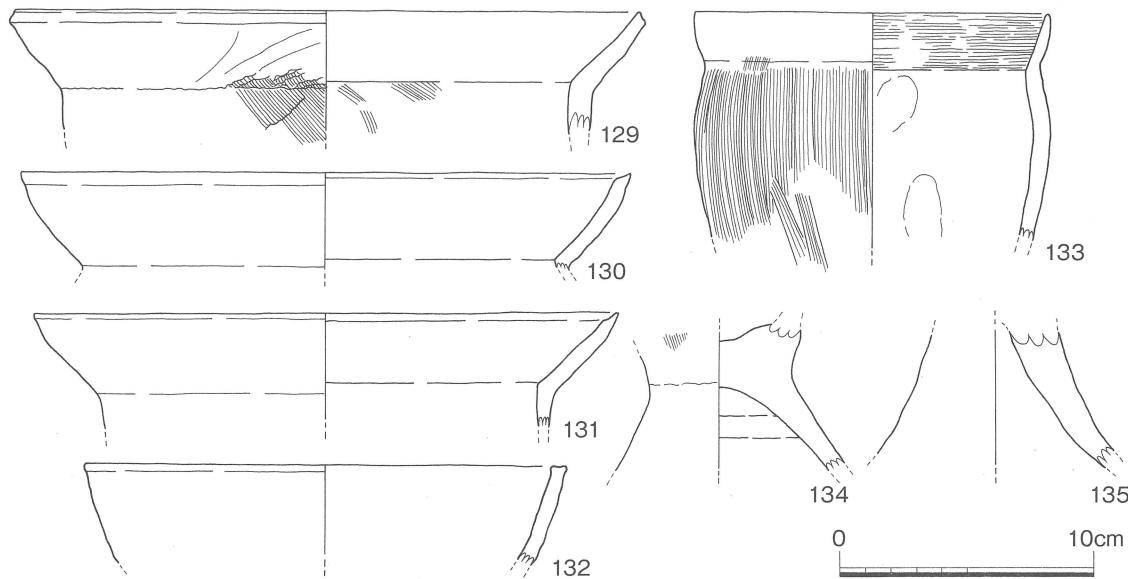
壺・甕（第62図）：119は口縁部が短く、開かない山陰系の二重口縁壺である。接合によってほぼ完全にまで復元できた。残存率は約4/5である。口径は15.2cm、器高は27.5cm、胴部最大径は器高のほぼ中位に位置し、23.7cmを測る。底部は平底に近い丸底で安定が悪い。底部が最も器壁が薄くできている。胴部は球形、頸部は短く直立しており締まりがよい。1次口縁は外反し、さらにその上に直立した短い2次口縁が付く。口唇部端は外側に丸くおさめている。口縁部は内・外面ともに横位のハケの後に横位のナデで形作り整えている。胴部外面は上位が縦位のハケ、中位から下位が斜位のハケ、内面は斜位のハケの後にナデを行っているが摩滅が著しく、調整が分かりづらくなっている。120は甕の口縁部から胴部下位までが残存していた。残存率は約2/3である。復元口径は16cmを測る。底部は欠損しており不明である。胴部は球形で、頸部はやや締まり気味で1条のくぼみが見られる。口縁部は下方を肥厚させながら外反し、口唇部端は内側に丸くおさめている。口縁部は内・外面ともに横位のナデを施している。胴部外面は上位にタタキ締めを施した後に斜位のハケ・ナデとその上から部分的にナデ消しを行っている。胴部内面は上位には回転を利用して小刻みに施した横位のハケ・横位のナデが残り、その後指頭圧痕。中位には横位のナデを行った後に横位のケズリ、下位には縦位のケズリを

施している。121は高壊壊部の破片資料である。復元口径が27cmを測り、大きい高壊になると考えられる。壊部下半は残存していないので不明。口縁部は外反し、大きく外側に開いている。内・外面ともに横位のナデであるが、摩滅している部分が多いため判然としない。122は甕の口縁部から胴部中位までが残存している。胴部は丸みを帯びており、なで肩を呈す。頸部は締まりがよく、口縁部は「く」の字状に外反している。口唇部端は断面方形で上面中央に一条のくぼみがあり、内方・外方につまみ出している。口縁部から頸部は内・外面ともに横位のナデで整えている。胴部は外面が縦位のハケ、内面が斜位のハケを施している。123は甕の胴部中位から底部にかけて残存している。底部は欠損しているがおそらく丸底になるだろう。胴部は寸胴で縦に長丸くなる。復元胴部最大径は胴部中位あたりに位置し、15.6cmを測る。胴部外面は縦位のハケ後にナデ、内面には不定方向へのハケを施している。

小型丸底土器（第63図）：124～127は小型丸底鉢である。124は接合によってほぼ完形に近く復元できた。口径は15.6cm、器高は6.6cmを測る。124は第65図の中では最も大きなものである。底部は丸底で、半球形の胴部を持つ。頸部はやや締まっており、一条の沈線状の窪みがめぐり、棒状の工具を止めながら引いたものか、くぼみの内部に細かい縦線が見られる。口縁部は若干外反しており、端部は丸く外向きにおさめている。外面は、口縁部が横位のハケの後に横位のナデとナデ消し、胴部が横位のケズリの後に指頭圧痕とナデを施している。内面は、口縁部が斜位のハケ、その後に横位のハケと横位のナデ、胴部・底部は横位のケズリを行っている。125は底部がわずかに欠損しており、残存率は1/4である。復元口径は14.0cm、残存器高は4.8cmを測る。胎土には粒子がほとんど含まれず非常に精製されている。底部は丸底、頸部は締まりが甘い。口縁部は中央が肥厚しながら外反しており、大きく外側に開いている。口唇部はつまんで丸くおさめている。口縁部上方は若干へこむ。丹塗りの痕跡が全体に確認できる。口縁部は内・外面ともに横位のナデ。胴部外面はナデ、内面は横位のナデを施している。最後に全体にミガキをかけている。126は復元口径が14.0cm、器高が4.8cmを測る。残存率は1/3である。125と同じく胎土にはほとんど粒子が含まれず、非常に精製され、胴部外面には丹塗りの痕跡が残る。形状も似ており、ほぼ同様である。底部は丸底、胴部は半球形、口縁部は中央が肥厚しながら外反しており、口唇部端はつまんで尖らせる。口縁部外面は縦位のナデ、胴部外面はナデ、内面は丁寧な横位のナデである。底部は内・外面ともにケズリを施している。最後はミガキで全体の仕上げを行っている。127は他より一回り小さく、底部が平底で胴部が深い。復元口径は11cm、器高は4.7cmを測る。口縁部は外反気味で大きく外側に開き、端部は丸くおさめる。若干口縁部外面は横位のナデ、内面は横位のナデの後に斜位のハケ。胴部外面は横位のハケと横位のナデ、内面はケズリの後に横位のナデを施している。128は小型丸底甕である。復元口径は10cm、残存器高は6.1cmを測る。底部は欠損しているがおそらく丸底になるだろう。胴部は深めで球形になる。頸部の締まりが甘く外反し、口縁部は長く、上の方で若干内湾する。口縁部外面が横位のナデ、内面は横位のハケの後に横位のナデである。胴部外面は横位のハケの後に横位のナデ、内面は縦位のケズリの後に横位のナデを施している。



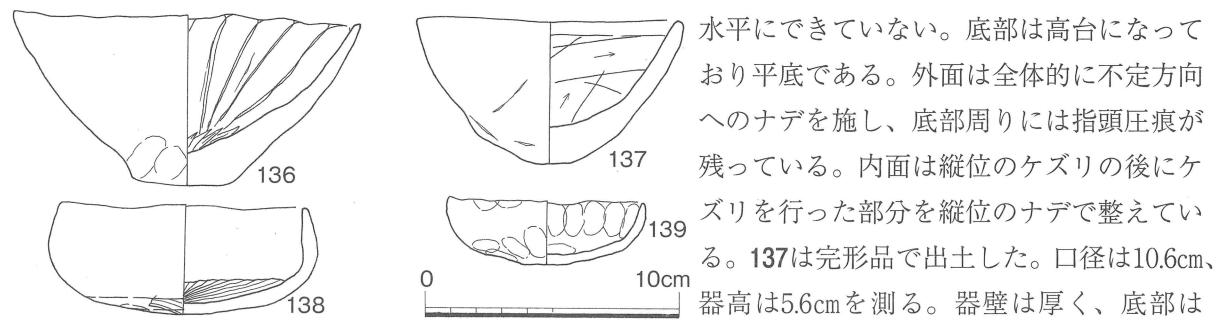
第63図 14区SB-2出土土器（小型丸底土器）(1/3)



第64図 14区SB-2出土土器（台付甕）(1/3)

台付甕（第64図）：129～132は台付甕の口縁部から頸部までの破片資料である。129は復元口径24cmを測る。口縁部は若干内湾し、端部は外側に斜めに切れている。頸部から下は真っ直ぐ落ちており、張りのない胴部になるだろう。口縁部は内・外面ともに横位のナデ、頸部外面は縦位のハケ、内面が斜位のハケ後に横位のナデを施している。130は復元口径24cmを測る。胎土に含まれている粒子が多く、金雲母も含まれる。口縁部は内湾しており、端部は内側に斜めに切れて、外方につまみ出している。129と同じ復元口径でおそらくどちらも大型の台付甕となるだろう。外面は横位のナデ、内面は摩滅しており調整が確認できない。131は復元口径23cmを測る。口縁部は内湾しており、130と同様な端部である。内・外面ともに横位のナデを施している。132は復元口径19cmを測る。頸部は締まりが悪く、口縁部はやや内湾気味で、端部は水平を呈す。端部上面には中央に一条のくぼみがあり、先を内方・外方につまみ出している。内・外面ともに横位のハケの後に横位のナデである。133は甕の口縁部から胴部中位までが残存している。口縁部は若干内湾しており、口唇部端は先を尖らせている。復元であるが胴部最大径と口径が同じ計測値となる。胴部は傾きからして下に行くほど先細りとなるので小型の台付甕であることが想像できる。口縁部外面は横位のナデ、内面は横位のハケの後に丁寧な横位のナデを施している。胴部外面は縦位のハケで、上から部分的にナデ消している。胴部内面は不定方向へのナデと指頭圧痕である。134・135は脚台部の破片資料である。134は甕底部と脚台部の接合した部分の残る破片である。外面は横位のナデ、内面は甕底部が縦位のナデ、脚台部分は横位のケズリ後に横位のナデである。甕と脚台部を接合した痕跡が明瞭に確認できる。135は内・外面ともにナデられているが指頭圧痕が残っている。

鉢（第65図）：いずれも鉢であるが、若干種類が異なる。136・137はやや深めの鉢、138・139は浅鉢である。136は口径13.8cm、器高は6.8cmを測る。口縁部は、下から上に摘み上げているため端部は

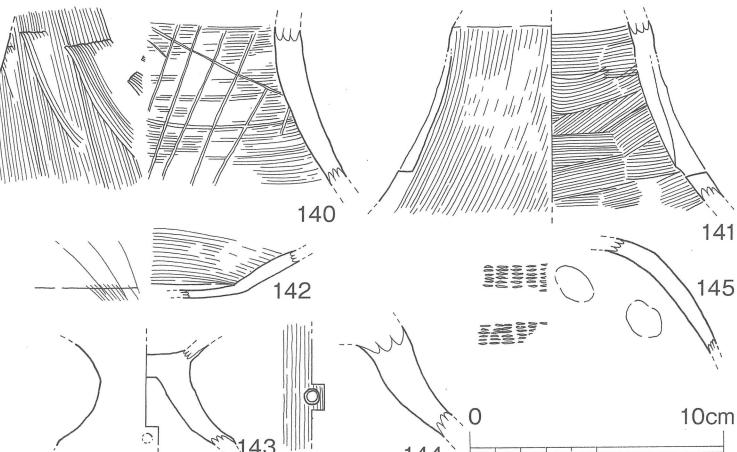


第65図 14区SB-2出土土器（鉢）(1/3)

水平にできていない。底部は高台になっており平底である。外面は全体的に不定方向へのナデを施し、底部周りには指頭圧痕が残っている。内面は縦位のケズリの後にケズリを行った部分を縦位のナデで整えている。137は完形品で出土した。口径は10.6cm、器高は5.6cmを測る。器壁は厚く、底部は

尖り気味の丸底で全体が「V」の字状になっている。外面は横位のハケ後にナデ消しを行っている。内面は横位のケズリを施した後にナデ消しを行っている。138は手捏ねの小型浅鉢である。復元口径は10cm、器高は4.2cmである。底部は安定の悪い平底である。胴部下位からは内湾しており、口縁部は直立する。口唇部端はまるくおさめる。下から上に摘み上げて作っているようだ。外面は底部が横位のケズリを施した後に指頭による押さえとミガキにより綺麗に整え仕上げている。口縁部周辺は横位のナデ。内面は底部が縦位のケズリ、口縁部は横位のハケ後に横位のナデを施す。139は小型浅鉢で、ほぼ完形品に近く残存していた。138より一回り小さく形状も似ている。口径は7.8cm、器高は2.6cmを測る。底部は安定がいい丸底である。口縁部は厚さが3mmしかなく、指で下から上に摘みあげ、内湾させたような手捏ね感がよく残っている。内・外面ともに縦位のナデを行い、口縁部を横位のナデで整えた後指頭により押さえられている。

器台他（第66図）：いずれも小さい破片資料なので詳しい記述はできないものの紹介する。140・141は長方形の透かしを持つ器台の脚台部片である。140は外面が縦位のハケの後に横位のナデ、内面は横位のナデ後に横位のハケを施している。141は外面が縦位のハケ後に縦位のナデによって部分的に消されている。内面は横位のハケ後に横位のナデを施している。142は高壊の壊部片である。壊部外面がハケの後ナデ、上方がケズリ後にナデで整えている。内面は横位のナデ、上方が横位のハケ後に縦位のナデを施している。143・144は高壊の脚台部である。143は脚柱部が短く、裾もあり開かないと思われる。外面がナデを行った後縦位のハケ、裾部に丸い透かし孔が穿孔されており、内面は縦位のケズリ後ナデを施している。144は脚柱部が短く、裾は開くと思われる。外面が全体にナデ、内面は柱部が縦位のケズリ、台裾部がケズリ後縦位のナデを施している。丸い透かし孔が脚柱部分に穿孔されている。145は甕の胴部である。外面にはナデの後2条の模様帶が見られる。内面はナデと指頭圧痕で整えている。



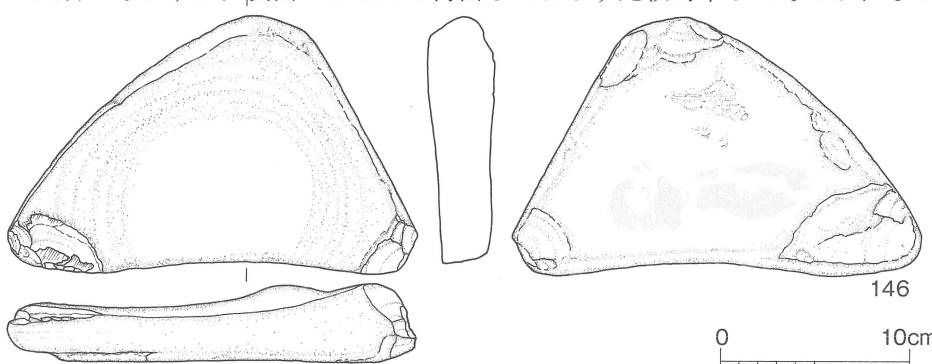
第66図 14区SB-2出土土器（器台他）(1/3)

(小野)

砥石（第67図）：146はきめの細かい砂岩製で、幅21.55cm、長さ13.7cm、厚さは最大で4.2cmを測る。重さは1.3kgを超え重量感がある。平面形状はやや歪な三角形を呈し、角は意図的に丸められているようだ。正面と下片が主な使用部分であるが、他の2辺もきれいに整えられている。正面は実測図に見られるように中央部がやや窪む形状を呈し、表面は非常に滑らかになっている。下縁も顕著な使用が見られ、平面形状は内湾する。いずれの使用面も平らではなく湾曲しており、磨製石斧等の石器用の砥石であろうか。裏面はほとんど湾曲しておらず比較的平らであるが、もともとの石材の平らな面

を利用しているものと考えられ、顕著な使用は見られない。ただし、実測図に示す網部分は非常に摩滅しており、鏡面のように滑らかな表面となっている。

(辻田)



第67図 14区SB-2出土石器（砥石）(1/4)

⑧ 12区SB-1 (第68図～第77図、図版5・図版14～15)

一検出状況

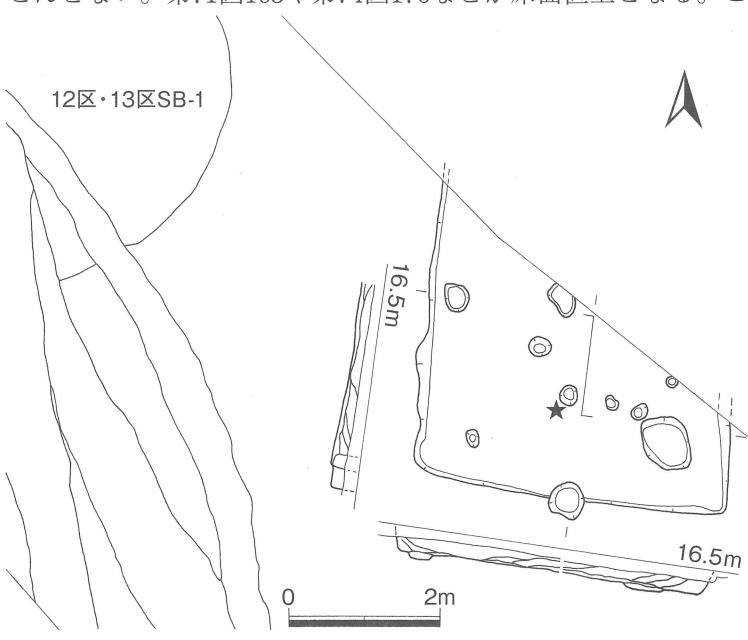
これまで紹介してきた住居跡群からやや東にずれた位置で検出されており、他の住居跡との切り合い関係はない。検出時は遺構検出面の黄色土に切り込むように住居内の黒色土が検出され、非常にはつきりと遺構検出ができた。住居跡の北半分は調査区外に続いているものと思われ、全体の形状ははつきりしないが、概ね1辺4mほどの正方形に近いものと考えられる。これまでの住居と同様、上面は削平されているが、立ち上がりは20cm～30cmほどが残っており、ほぼ垂直に立ち上がる。床面と考えられる硬化面は検出されていないが、土層図に示す最下層に薄く堆積する土層には、炭化材や土器の細片が含まれており、上層とは堆積状況や内容物が異なる。一様に薄く堆積している状況などからも、張り床として床面に敷かれたものと考えられる。住居北側の調査区壁面直下に検出された浅い土坑からは、炭化物が幾層にもわたって堆積している状況が見られ、炉跡に関わる痕跡と考えられるが、焼土等は検出されていない。ちょうど住居跡の中央部分にあたる場所であり、炉跡脇の廃棄坑であろうか。炉跡は土坑東側の調査区外に検出される可能性が高いと考えられる。この他にも平面図に示すとおり、床面にピット状の遺構や浅い土坑等が検出されている。住居の屋根を支える柱がどれになるかは判然としないが、しかしながら★マークのピットが深さ50cmを測る。また、その左上のピットも深さ25cmを測り、これらのピットが住居の柱穴であろうか。それ以外のピット状遺構は深さ数cm～12cm程で、柱の痕跡とは考えにくい。住居跡の周囲には多くのピット状遺構が検出されており、後世の掘り込みを気づかずして調査を行っているとも考えられる。また、住居右下隅の比較的大きな土坑は、深さ3cm～4cmと浅いものであるが、焼土粒や炭化物を多く含んでおり、炉跡に関わる遺構、もしくは廃棄坑であろう。

(辻田)

一遺物出土状況

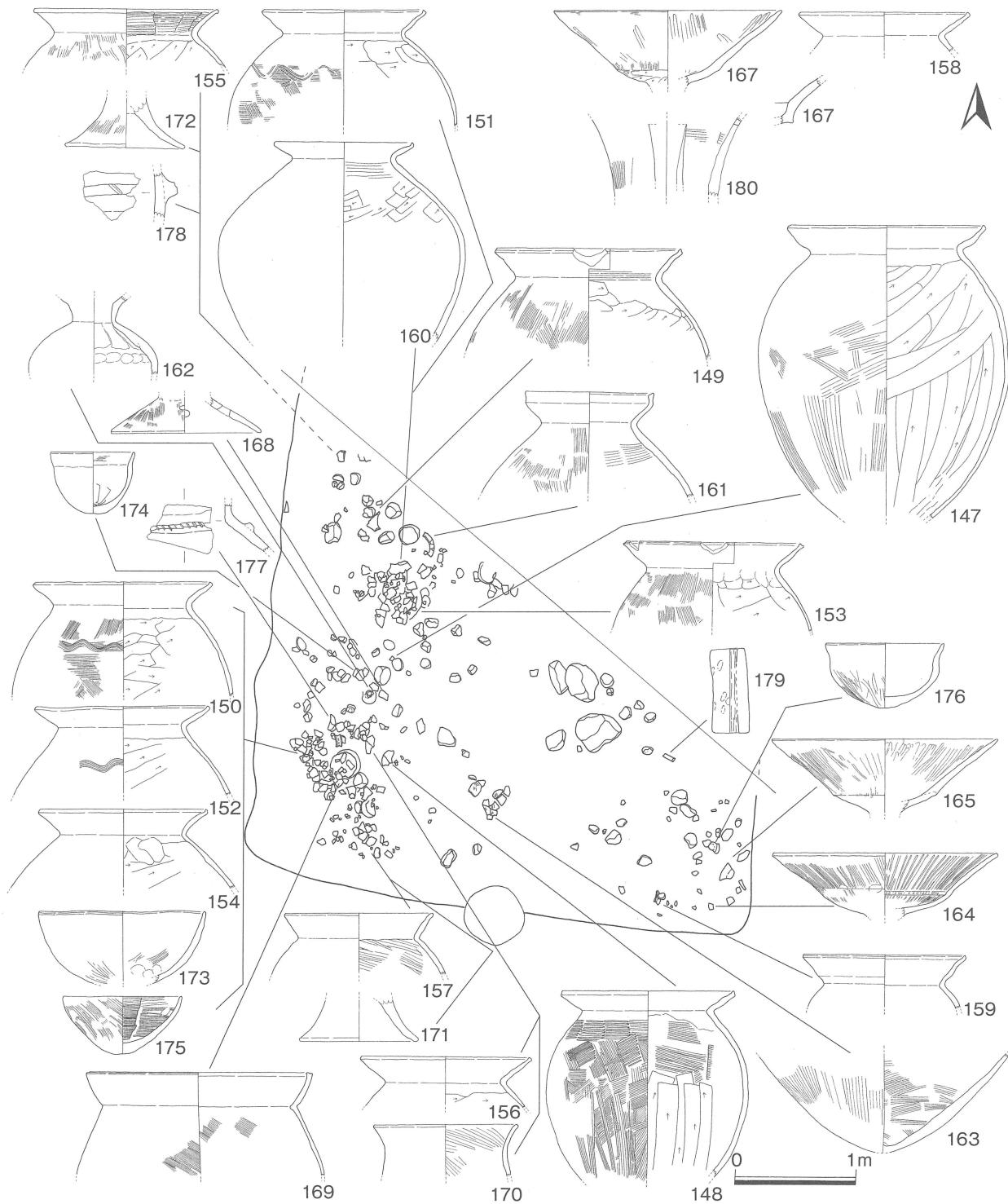
第69図に図示するとおり、かなりの数の遺物が検出されている。遺構検出時から多くの遺物が覆土から顔を出しておらず、鋤簾で遺構を精査するのが困難なほどであった。遺物は住居の西側と東側からまとまって検出されているが、西側が著しく集中して検出されている。また、土層図には反映していないが、ほとんどの遺物は床面と考えられる部分より上層で検出されており、床面直上の土器片はほとんどない。第71図163や第74図176などが床面直上となる。これに対して、住居中央部に見られるよ

うな礫や遺物の集中している部分において検出される礫については床面直上で検出されているものが多い。また、土層図からみると、西側の土器集中部分の土層が最後に住居跡内に入り込んでいる状況がみられる。これらのことから、住居を廃棄する際、住居内を清掃し、その後まず初めて不用な礫を住居内に投げ入れ、土砂によって住居を埋める際に、同じく不要となった土器類と一緒に住居内に充填したものと考えられる。また、住居内への土砂の充填についても、東側から数度行い、最後に不

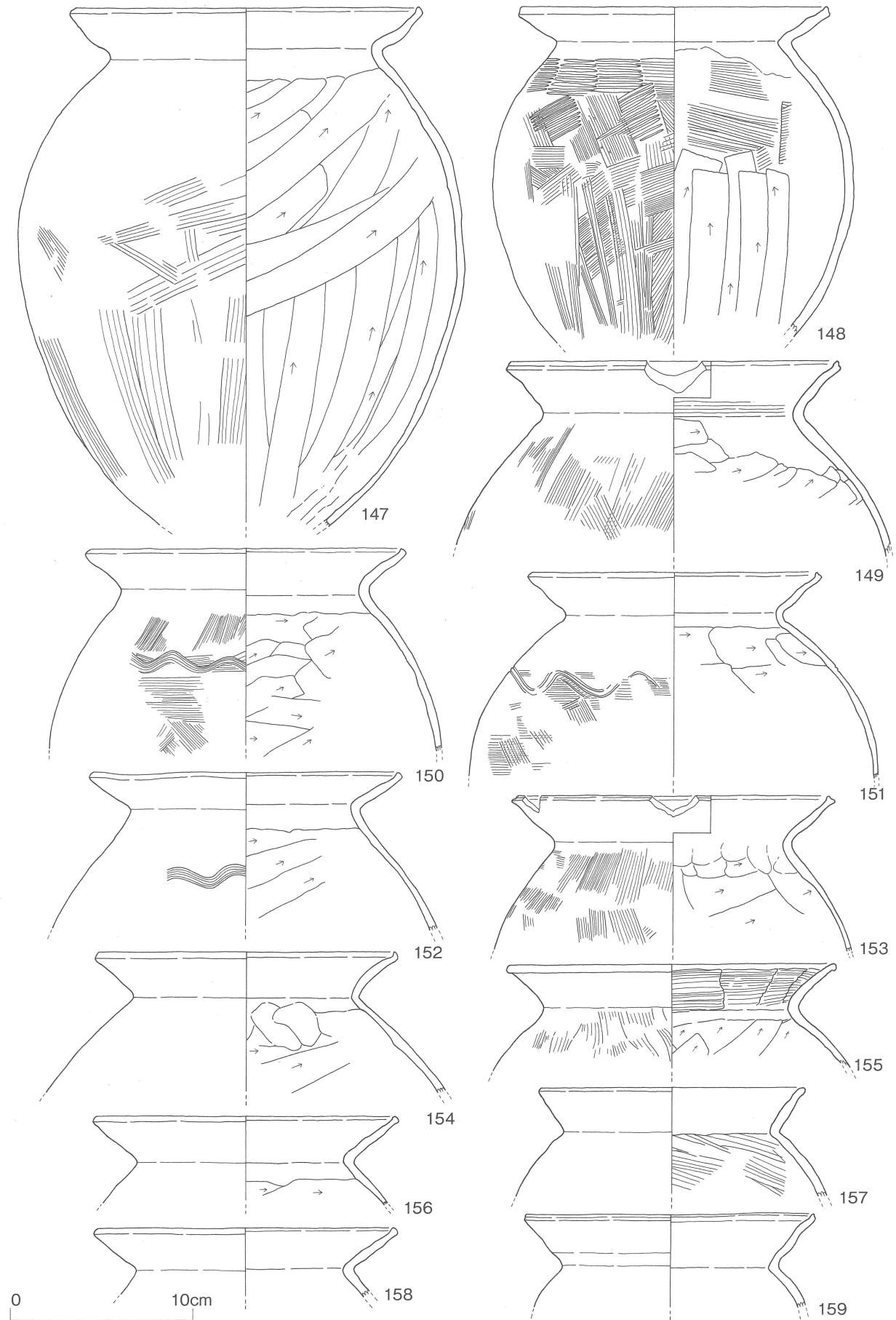


要となつた土器とともに西側への土砂の充填を行つたものと考えられる。したがつて、検出された遺物は住居使用時の状況をそのまま反映しているとは考えられない。住居全体を掘り上げているわけではないので、まだまだ接合関係にある遺物も残されているかも知れないが、検出された遺物には完形に復元されるものは見られない。いずれも破片資料であることも、前述した使用時の状況を表していないことを物語ついている。出土した遺物の中で特徴的な物としては、土錘とかんがえられる円筒状土器がある。龍王遺跡の調査ではこの1点のみである。

(辻田)



第69図 12区SB-1遺物出土状況 (1/50)

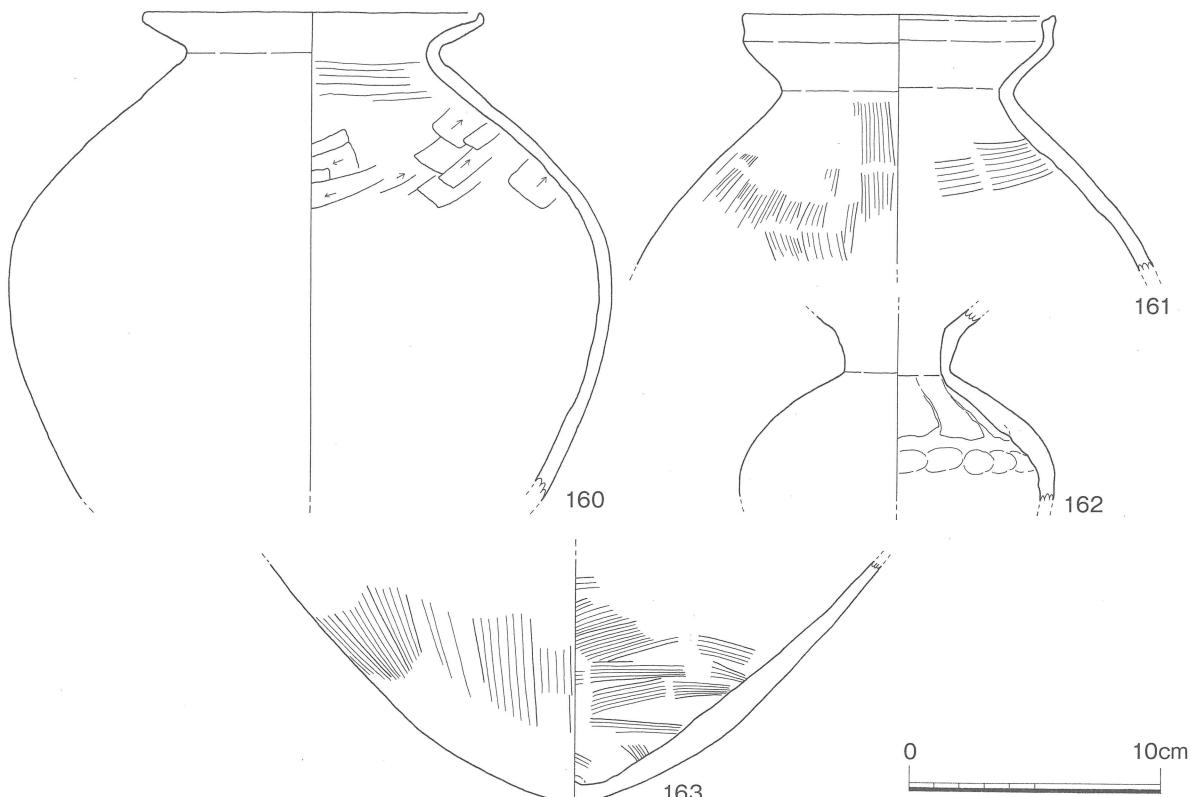


第70図 12区SB-1出土土器（甕）（1/3）

一出土遺物一

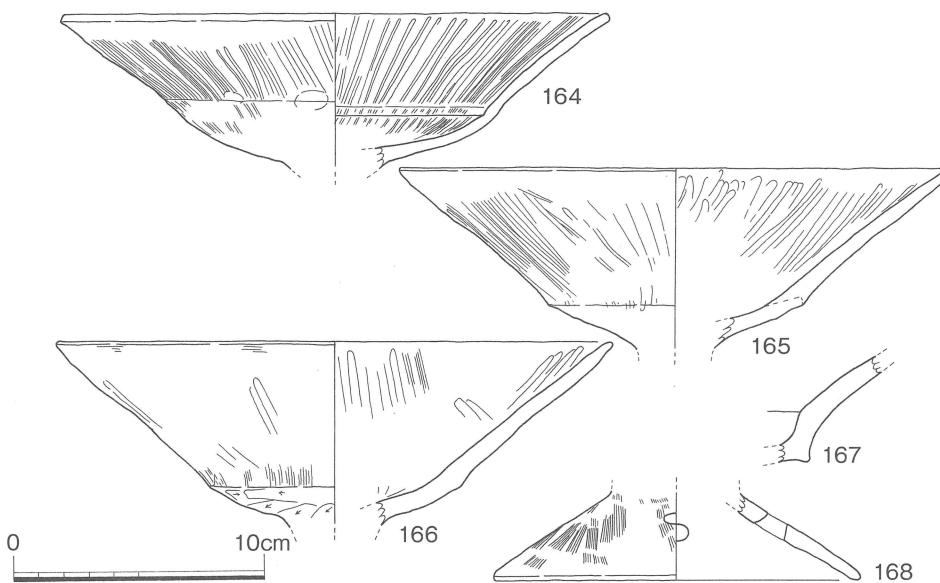
甕（第70図）：中型の甕ばかりを集めた。いずれも底部が欠損しており不明である。胴部は最大径が器高の中央よりやや上の位置にくるタイプで、なで肩を呈する。頸部は締まりがよく、口縁部は波打ちながら、「く」の字状に外反する。口唇部端はほとんどが外側に斜めに切れて、先を内側に向かってつまみ上げて、内面に明確な稜を作っている。147～153は口縁部が内・外面ともに横位のナデ、胴部外面がハケ、胴部内面がケズリを施している。これらの特徴から布留系の甕であることが分かる。150～152は外面に波状沈線文を施し、波状文より上は縦位のハケ、下は横位のハケを行っている。149・153は口縁部を故意的に打ち欠いた痕跡が見られる。149は内側から外側に向って綺麗に面取りされ、153は2ヶ所打ち欠いたままにしている。148は外面にタタキを施し、その上から横位のハケを行っている。155の口縁部内面は回転を利用した小刻みな横位のハケが見られる。157は内面に目の粗い斜位のハケを施している。158はナデ、159は丁寧な横位のナデ後にミガキを施す。

壺他（第71図）：160～162は複合口縁壺の口縁部から胴部中位の破片資料である。160は復元口径が13cm、復元胴部最大径が23.7cmである。底部形態は欠損しており不明。胴部はなで肩で、中位に大きく膨らみを持つ。頸部は短く締まりがよい。1次口縁は中央が肥厚しながら外反し、その上に非常に短い直立した2次口縁が付く。胴部内面は上位に横位のハケとケズリが施されている。161はなで肩で、頸部は締まる。1次口縁は外反し、2次口縁は短く直立気味である。口縁部屈曲部の稜線は甘い。口縁部は内・外面ともに横位のナデ、胴部外面は縦位のハケ、内面は横位のハケを施している。162は口唇部端が欠損しているため判然としないが、小型の二重口縁壺と考えられる。胴部は扁球形で、肩部が著しく張っている。頸部は直立し、外反する1次口縁が付く。外面は横位のナデ、内面は頸部から胴部上位にかけて接合した痕が見られ、それより下は指頭圧痕が残り、ナデが施されている。163は底部のみが残存している。残存器高は9.5cmを測り、大きい。底部は欠損しているが尖底である。外面は縦位のハケ、内面は横位のハケと指頭圧痕を施している。床面直上の資料である。



第71図 12区SB-1出土土器（壺他）（1/3）

高坏（第72図）：164～166は高坏の坏部で、口縁部から脚柱部と坏部の接合部分までが残存している。いずれも脚柱部は欠損しているが、おそらく細くて長いものが付き、「ハ」の字状に開く台裾部を持つタイプだろう。坏部は有段で深く、長くて外反する口縁部が付く。口径・調整・器形也非常によく似ている。内・外面ともに放射状のミガキを暗文に施しており、その上からナデで整えて仕上げている。164は口径が21.7cmを測る。雲母粒子を多く含み、胎土は非常によく精製されており仕上げがきれいである。165は復元口径21.8cmを測る。内・外面ともに磨耗しており、器面が粗いため調整はあまり明瞭ではない。166は復元口径21.6cmを測る。外面の坏部下半には縦位のケズリを施している。167は高坏坏部だが段の部分のみしか残存していなかった。胎土には角閃石が多く含まれるため在地系のものか。段部分が他のものと違い角張って、角を外側につまみ出している。わずかに残る口縁部は外反する。内・外面ともにナデを施している。168は台裾部の破片資料である。残存率は50%。復



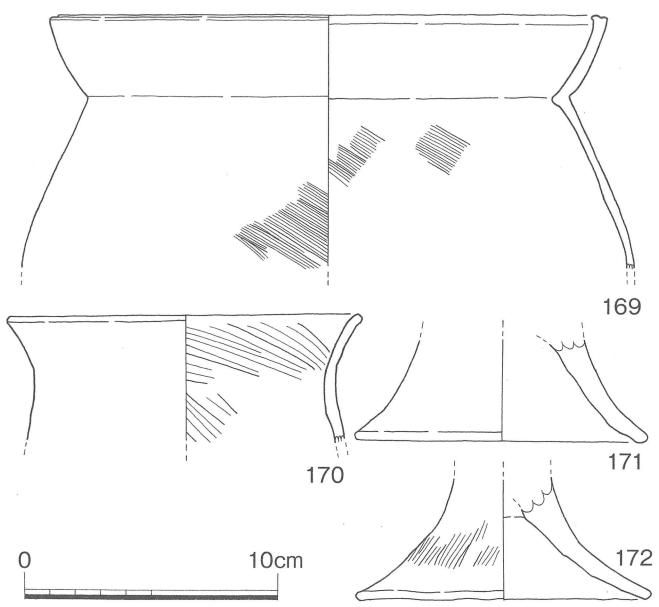
第72図 12区SB-1出土土器（高坏）(1/3)

元台裾部形は14cmを測る。丸い穿孔が2ヵ所確認できた。おそらく当初は4ヶ所あっただろう。外面は横位のナデ後縦位のハケを施しており、内面は器面に鉄分が多量に付着しており確認できない。

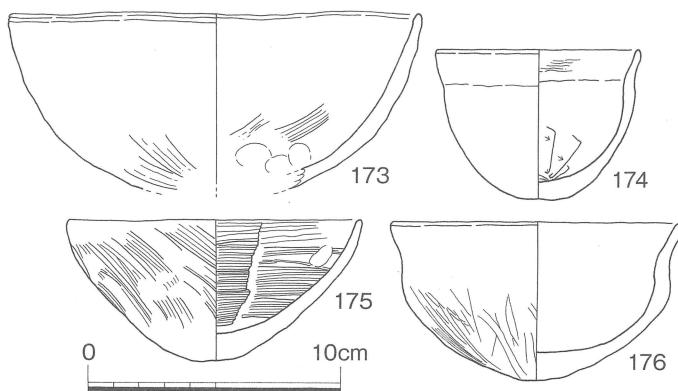
台付甕（第73図）：

169・170は台付甕の口縁から胴部上位である。169は真上から見ると口縁部形状が橢円と

なっており、短い部分で20.2cm、長い部分で22cmを測る。胎土に多量の角閃石を含むため在地のものだろうか。器面が剥落しており、判然としないが内・外面ともに斜位のハケを施している。170は復元口径が13.5cmを測る。胴部が寸胴な台付甕で、169の半分の大きさになるだろう。頸部にはまったく締まりがなくそのまま外反する口縁部につながる。外面は横位のナデと指頭圧痕で手捏ねのようなでこぼこ感が残る。内面は太目の斜位のハケ後に上から斜位のナデを施している。171・172は脚台部である。171は台裾部径が11.6cm、172は11.2cmを測り、裾部端は丸くおさめている。171は外面が縦位のケズリを施した後、縦位のナデを行っている。内面は横位のハケ後に横位のナデを施している。172は甕との接合部分が細めである。外面が横位のナデ後に縦位のハケ、内面はナデを施す。



第73図 12区SB-1出土土器（台付甕）(1/3)

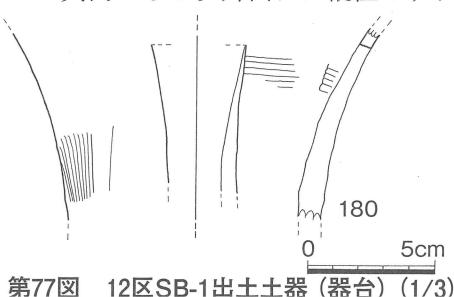


第74図 12区SB-1出土土器（鉢）(1/3)

鉢（第74図）：いずれも残りが非常によい資料である。173は大きめの浅鉢である。復元口径は15.8cm、残存器高は6.9cmを測る。底部は欠損しているが、丸底である。内・外面ともに斜位のハケの後に不定方向へのナデを施している。底部内面は指頭圧痕が明瞭に残る。口唇部端には文様に見えるように横位のハケを施しているようである。174は手捏ねの小型甕である。接合によってほぼ完形にまで復元でき、口径は7.9cm、器高は6.9cmを測る。底部は丸底に近い平底で、頸部は締まりが甘い。口縁部は短く、若干内湾している。口唇部端は丸くおさめている。胴部外面は不定方向へのハケ後に行なった指頭圧痕が明瞭に残る。胴部内面は回転を利用した縦位のケズリを行なっている。175は中型の浅鉢で、口径11.5cm、器高5.5cmを測る。底部は丸底で、頸部は締まりが甘い。回転を利用した調整を施しており、胴部外面は縦位のハケの後に部分的にナデ消しをしている。胴部内面は横位のハケを施している。176は中型の鉢である。口径は11.4cm、器高は6.2cmを測る。底部は尖り気味の丸底で、頸部は締まりが甘い。口縁部は短く、若干内湾している。口唇部端は丸くおさめる。口縁部は内・外面ともに丁寧な横位のナデを施している。胴部外面は不定方向へのケズリ、内面はケズリ後にナデできれいに整えてケズリの痕を消している。

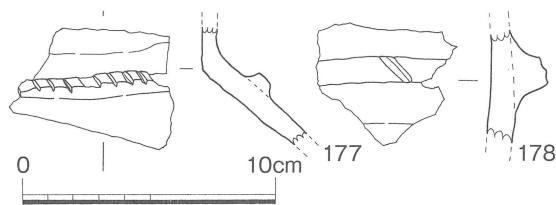
胴部片（第75図）：177・178は胴部の破片資料である。どちらも破片が小さいため、器種や器形などの詳しいことは判然としない。いずれも器壁が非常に厚く、胎土に角閃石を多量に含んでいるため在地のものだろうか。177は頸部から胴部上位が残存している。頸部は直立しており、頸部から2cm下辺りに突帯が貼り付けられている。突帯には先が尖ったもので斜めに刻目をいれて文様を施している。外面は突帯の上下には横位のナデを施している。内面は全体に横位のナデ、頸部と胴部を接合した痕跡も見られる。178も突帯が貼り付けられており、1ヶ所に刻目が残る。外面は突帯の上下に横位のナデ、内面は斜位のハケを施した後に横位のナデを行なっている。

円筒状土器（第76図）：179は完品のまま出土した。上端の口径は3.2cm、高さは8.2cmである。胎土には赤色粒子・白色粒子・角閃石を含んでおり在地のものか。円筒状を呈し、土錐と考えられる。上・下端はきれいに面取りされており、特に下端は立てたときに座りがよい。棒状のものに粘土を巻きつけ作ったと考えられ、内部の壁面はほぼ真円となる。外面には縦位のナデと指頭圧痕が明瞭に残っている。

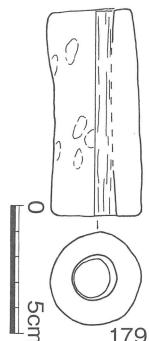


第77図 12区SB-1出土土器（器台）(1/3)

器台（第77図）：180は器台の受部の破片資料である。残存率は1/8で、四方にバチ状の透かしが上下8ヶ所入ると推定される。透かしはケズリによって開けられ、その後ナデできれいに整えているようだ。器面は剥がれており調整は判然としないが、外表面は縦位のハケ後に不定方向へのナデを施しており、内面は横位のハケ後に部分的に横位のナデで整えている。（小野）



第75図 12区SB-1出土土器（胴部片）(1/3)



第76図
12区SB-1出土
土器 (1/3)

⑨ 13区SB-8 (第78図～第80図、図版15)

一検出状況

13区SB-7や13区・14区SB-5を切り込むように掘り込まれている。大部分は調査区外へ広がっており詳細は不明であるが、平面形は1辺4mほどの方形となるものであろうか。12区SB-1や14区SB-1と同様の後出する時代のものである。検出された場所は多くの住居跡が切りあっている部分であり、平面的な検出での確認は困難であった。土層断面の観察によれば、黄褐色粘質土（下層の遺構掘り込み面）のブロック（径1cm程）を含み、特徴的なことは鉄分の沈殿が多く、赤色の粒子が多く見られる。他の住居跡のそれより若干赤っぽく見える。立ち上がりは20cmほどが確認され、壁面はほぼ垂直である。住居内の遺構や床面の状況、土層の堆積状況などは調査範囲が狭小であり判然としない。規模が同様と考えられる12区SB-1や14区SB-2などと比べると、住居跡の主軸の方向がずれた格好となっている。同様の方形の住居は12区～15区及び、北側の後述する方形環溝周辺からも検出されているが、住居跡の主軸が大きく2分される。時期差によるものであろうか。

(辻田)

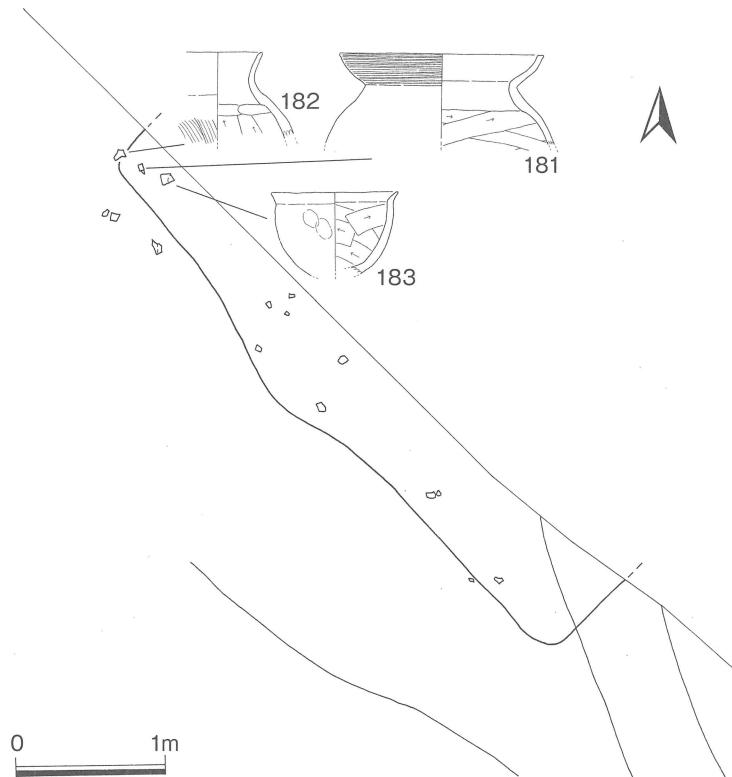
一遺物出土状況

遺物の検出は次頁第79図に示すとおり、非常に希薄なものである。調査面積が狭いこともあり多くを語れる状況ではない。検出状況でも述べたが、住居跡の主軸の違いが時期差とも考えられるが、出土遺物は細片ばかりであり、積極的に比較対照とできる資料とは言いがたい。

(辻田)



第78図 13区SB-8検出状況 (1/100)

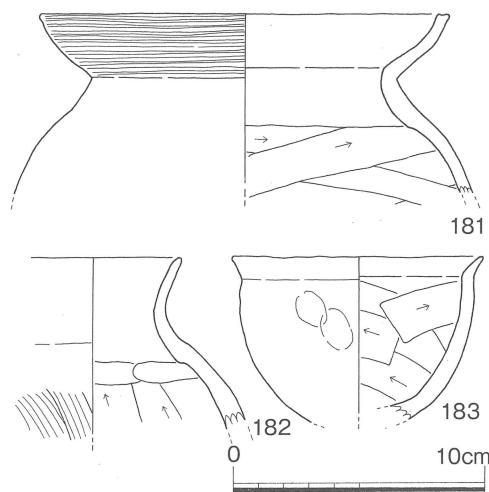


第79図 13区SB-8遺物出土状況 (1/50)

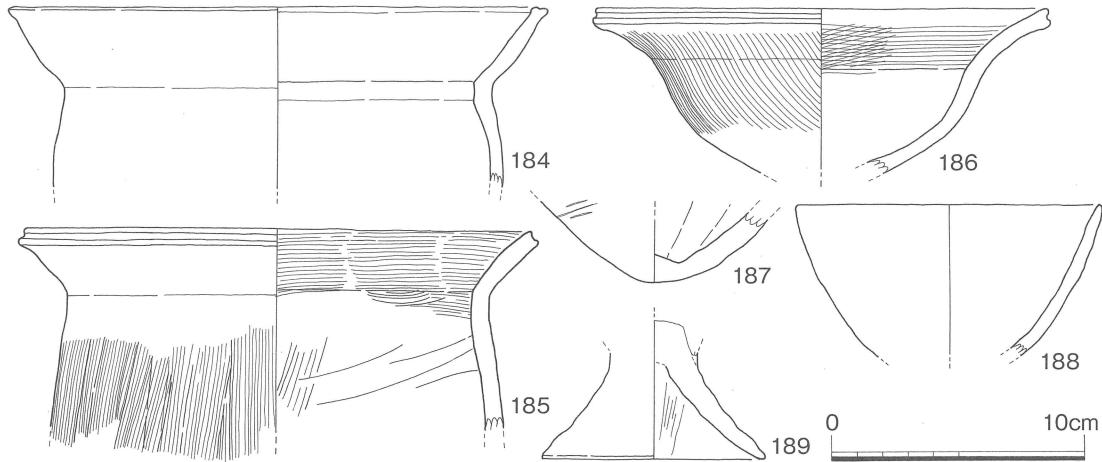
一出土遺物一

甕（第80図）：接合することができはっきりと器形の分かる分を図示した。これらは出土した場所が3点とも近い。181は甕の口縁部から胴部上位にかけて残存していた。復元口径は16cmを測る。胴部は肩が張っており、頸部は締まっている。口縁部は「く」の字状に外反し、中央辺りで若干内湾する。口唇部端は上面に1条のくぼみがある。外面は、胴部が横位のナデ、口縁部が横位のハケ後に横位のナデを行っている。内面は、胴部が横位のケズリ、頸部・口縁部は横位のナデを施している。胎土には金雲母が多く含まれ、角閃石が全く含まれていないことから、搬入品である可能性が高い。182は壺の口縁部から胴部上位にかけてだが破片資料で口径を復元することは困難であった。胴部は肩が張り、丸くなっている。頸部は締まりが甘く、口縁部は外反している。口唇部端は丸くおさめる。胴部外面は若干斜位のハケが残っている。内面は、縦位のケズリを施す。口縁部は内・外面ともに横位のナデで整えている。183は手捏ねの小型甕で底部は欠損している。口径10cm、残存器高6.4cmを測る。残存率は約1/2である。底部は丸底で、頸部は締まりが甘い。口縁部は短く外反し、手捏ねらしく水平とはならない。外面は、横位のナデ・指頭による成形の後にミガキ消しを行っている。内面は、ケズリを行いナデで整えて丁寧なミガキを行っている。胎土に含まれる粒子がほとんどなく、よく精製されており非常にきれいに仕上がっている。

(小野)



第80図 13区SB-8出土土器 (1/3)



第81図 14区SB-3出土土器 (1/3)

⑩ 14区SB-3 (第81図、図版16)

一検出状況

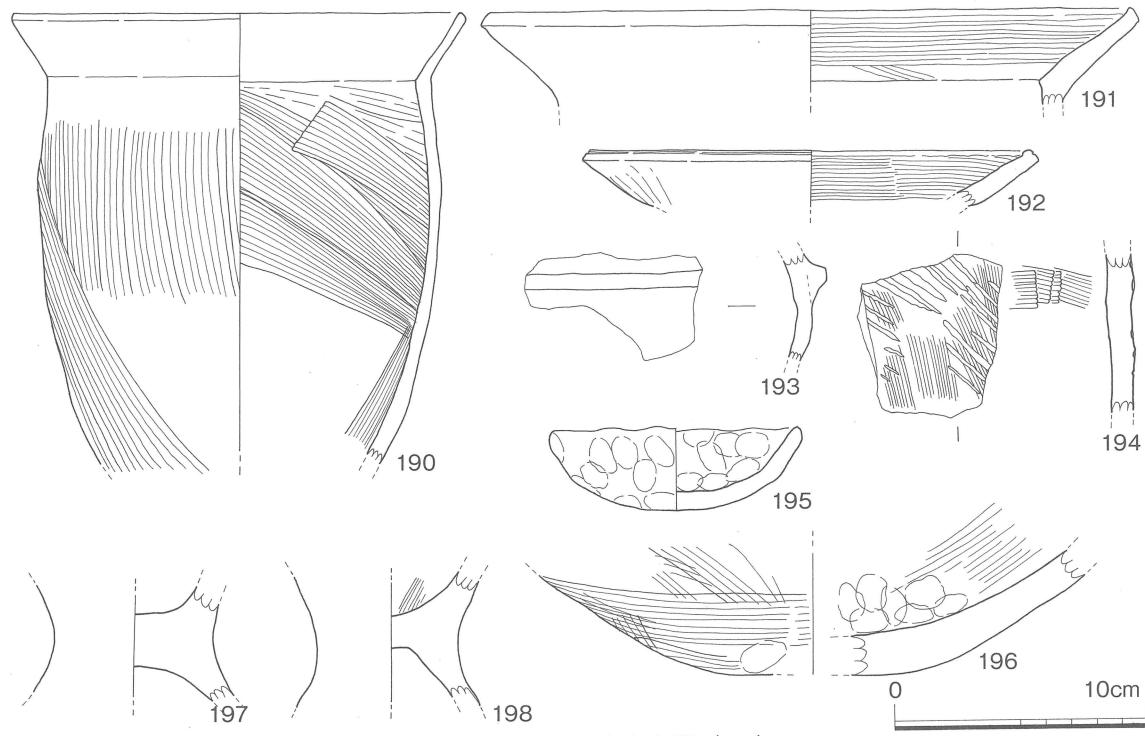
①の検出状況でも述べたが、14区SB-5の西側で遺物の集中地点が検出されており、焼土痕やピットも検出されている。その周囲には床面と考えられる硬化面なども確認できるため、本来は竪穴住居が存在していたものと考えられるが、住居の立ち上がりは確認できなかった。
(辻田)

一出土遺物

甕他 (第81図) : 184は甕の口縁部から胴部上位が残存している。復元口縁部径は32cmを測り、大きい。おそらく台付甕と思われるが、胴部は真っ直ぐスリムではなく上位にやや膨らみを持つ。頸部は締まりがよく、内面には2本の稜線が見られる。口縁部は中央が肥厚しながら若干内湾しており、口唇部端には1条の沈線が施されている。内・外面ともに横位のナデで仕上げている。185は184と同じく台付甕の口縁部から胴部上位が残存している。184と違い、胴部はスリムに真っ直ぐ落ちており、頸部は稜線が分かりづらくあまり締まっていないようだ。口縁部は短く外反しており、一番厚くできている。口唇部端には1条のくぼみが見られる。胴部外面は縦位のハケ、内面は斜位のハケを行っている。口縁部は内・外面ともに横位のナデで、内面のみその後に横位のハケを施している。186は身が深い高壊の壊部片である。有段だが稜が甘く、壊部下半は鉢のように半球形、口縁部は外反している。口唇部端には1条の沈線が施されている。外面は縦位のハケ後横位のナデを、内面は口縁部分が横位のナデ後横位のハケ、胴部がナデを施している。187は鉢の底部の破片資料である。底部は安定が悪い小さい平底。外面は横位のハケ後に横位のナデ、内面はケズリ後にナデを行っている。188は浅鉢の口縁部から胴部下位が残存している。底部は残っていないがおそらく丸底になるだろう。器壁の厚さは均一である。内・外面ともにナデだが、外面は縦位・斜位のナデ、内面は斜位のナデを施しているようだ。189は台付き甕脚台部の破片資料である。復元台裾部径は8.8cmを測る。脚台部が小さいので、上に付く甕もあまり大きいものではないと予想される。外面は、横位のナデと指頭圧痕である。内面は、上から下に縦位のハケ後に縦位のナデを施している。いずれも胎土に角閃石を多く含んでおり、在地系のものと考えられる。
(小野)

⑪ 22区SB-2・22区SB-3・22区SB-4 (第26図・第82図～第84図、図版16)

方形環溝検出時のトレンチから検出されている。方形または長方形の平面形状を呈すると考えられるが、調査区域外に広がっているため詳細は不明である。本来盛土による保存地域であったため完屈せずトレンチ調査のみにとどまっている。いずれも20cm～30cm程の立ち上がりが確認されており、良好な残存状況と考えられる。トレンチ内の少ない遺物であるが紹介する。
(辻田)

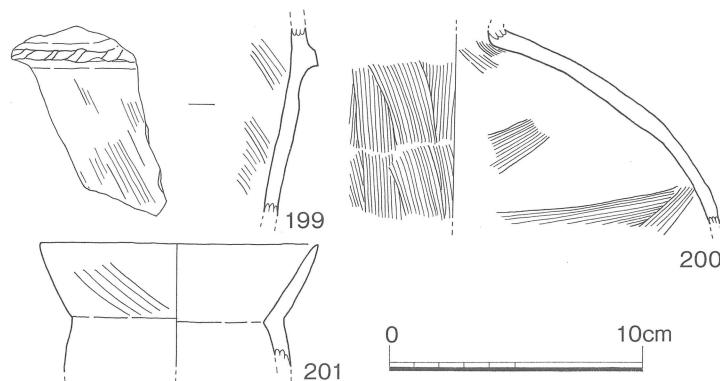


第82図 22区SB-2出土土器 (1/3)

一出土遺物一

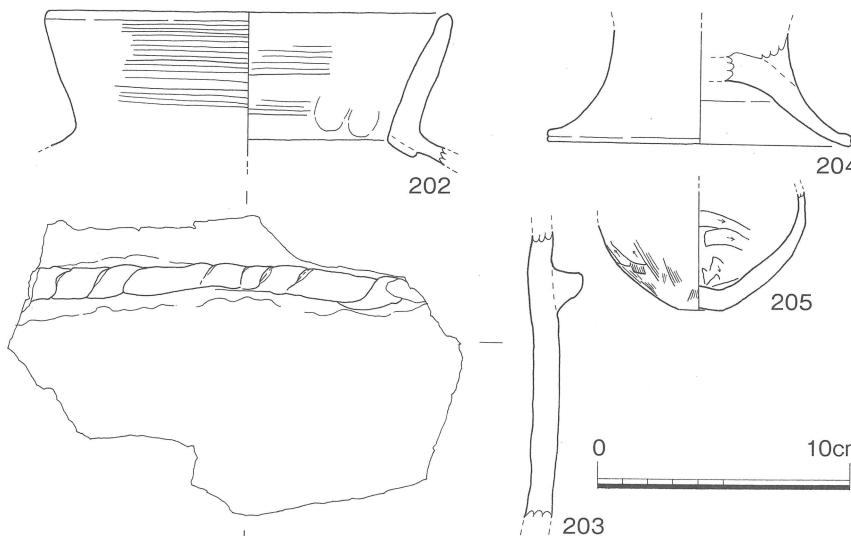
甕他（第82図）：190は台付き甕で、口縁部から胴部下位が残存している。口縁部は直ぐ外反し、口唇部は平たくなっている。台付甕特有のスリムな形状をした胴部で、最大径は肩部のあたりで16cmを測る。頸部は締まりがよく、口縁部は外反している。胴部外面は上位に縦位のハケ、中位より下に斜位のハケを施している。内面は頸部から下は斜位のハケである。胴部下位の一部分に被熱による赤色化が見られ、他は全体的に黒くなっている。191は台付甕の口縁部のみの破片資料で、大きく外反し、口唇部端は断面方形となっている。若干残る頸部は締まりがよく、内面は稜線が明確で、接合を行った痕跡も残っている。外面はナデ、内面は横位のハケを施している。残存率が少ないので詳しくは分からぬ。192も口縁部のみの破片資料である。口縁部が外反し、口唇部には上面に1条の沈線があり、端部は内側に摘まみ入れている。外面はナデ後にケズリ・ミガキである。内面は横位のハケを行っている。193は突帯が張り付けられた胴部片である。外面の突帯部分はナデ、突帯の下は縦位のナデ、内面は横位のナデを施している。194は胴部片で、外面が縦位のハケ後に斜位のタタキを行っている。内面はナデ後に斜位のハケである。195は小型の浅鉢である。残存率は30%。底部は安定のいい丸底で、口縁部は外側に開き水平にできていない。器壁はほぼ均一である。内・外ともにナデを行い、指頭圧痕が明瞭に残っている。このことから手捏ねの浅鉢であることが分かる。196は甕底部の破片資料である。平底を呈しており、器壁は非常に厚くできている。外面は下から上に向って斜位のハケである。

内面も下から上に向って縦位のハケ後に指頭圧痕である。内面は磨耗しているため調整が部分的にしか残っていない。197と198は甕の底部と脚台部の接合部分である。197は外面が横位のナデ後に横位のハケ、内面は甕の底部は斜位のハケで、脚台部は横位のハケと横位のナデを施している。198は内・外ともにナデ調整である。



第83図 22区SB-3出土土器 (1/3)

甕他（第83図）：199は貼り付け突帯の施された胴部片である。細くてねじれたような突帯が貼り付けられており、器壁は6mmで薄くできている。外面は突帯部分が横位のナデ、突帯の下は縦位のハケを行っている。内面は斜位のハケを施している。200は肩部分の破片資料である。胴部は肩が張り、若干残る頸部から口縁部は外反すると考えられる。外面は頸部から3cm下は横位のナデ、その下が縦位のハケである。内面は横位のハケだが、大半が磨耗しており、部分的にしか分からぬ。201は小型丸底土器の鉢である。口縁部から頸部までしか残っておらず、底部はおそらく丸底だと思われる。口縁部は「く」の字状を呈しており、若干内湾する。口唇部端は摘まみあげたように尖っている。外面は口縁部が横位のナデ後に斜位のハケ、内面は横位のナデを施している。



第84図 22区SB-4出土土器 (1/3)

壺他（第84図）：202は壺の口縁部片である。器壁が厚く、直立している。内・外面ともに横位のナデ後に丁寧な横位のハケを施している。頸部には接合を行った痕跡が明瞭に残っている。203は突帯が張り付けられた胴部片である。突帯には刻目が施されている。内・外面ともに横位のナデで整えている。突帯の貼り付け具合がやや甘いようだ。胎土には角閃石が大量に含まれているため在地のものか。204は台付甕の脚台部片である。

ある。スカート状に開いており、端部には1条の沈線が施されている。内・外面ともに横位のナデで整えている。205は小型の浅鉢である。底部は径1.7cmを測る平底で、若干中央にくぼみがあるため輪底を使用して作ったものか。胴部外面は縦位のハケ、内面は底部には回転を利用したくもの巣状のケズリ痕が明瞭に残っている。その上に横位のケズリを施す。焼きが非常によく、内・外面ともにきれいでミガキをかけ仕上げている。が、胎土に含まれる粒子が多く、露出している。（小野）

⑫ 拡張区SB-1（第26図・第85図～第86図、図版16・図版29）

一検出状況一

右頁は拡張区SB-1から検出された遺物である。拡張区は工事による表土除去時に遺構が露出してしまったため急遽調査を行った部分である。基本的に遺構の検出まで終了しているが、一部確認のために完掘した遺構や、トレーナによる調査を行った部分がある。SB-1は長方形の竪穴住居と考えられ長軸8m、短軸6mを測る、やや大型のものである。調査は中央部分に十字のトレーナを設定し、床面までの掘削を行った。20cm～30cm程で床面と考えられる硬化面が検出され、中央部分には炉跡と考えられる焼土も確認されている。第26図の遺構検出図からも判るとおり、SD-2を切るように掘り込まれている。また、SD-1と同じく切られる格好で円形の竪穴状遺構が検出されている。そのほとんどがSB-1により消滅しているが、トレーナ調査によって10cm～15cmほどの立ち上がりが確認できた。出土遺物は高壊の破片等が少量検出されている。先行する弥生時代の住居跡と考えられ、径10m程の大型のものと予想される。第26図からも判るように、この他にも住居跡と考えられる遺構や溝状遺構、柱穴等が無数に検出されており、12区～14区にかけて検出された住居群が、当時は拡張区にまで広がっていたことが予想され、調査精度を上げれば多くの調査成果が得られる場所と考えられる。（辻田）